05年

第１７回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第１２集》

教育に関する勅語。漢字は新字体にしました

朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツ
ルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニ
シテ世世厥ノ美ヲ済セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教
育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫
婦相和シ朋友相信シ恭倹己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ
修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ
広メ世務ヲ開キ常ニ国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ一旦緩急アレ
ハ義勇公ニ奉シ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如
キハ独リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ
遺風ヲ顕彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ実ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶
ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シ
テ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳拳服膺シテ咸其徳ヲ一ニセン
コトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

ところ　緑生涯学習センター
月・日　平成１７年７月９日
戦争体験を語り継ぐ会実行委員会

◎発刊のことば

「六十年前、日本人は今では想像もつかない日々を送っていた」このナレーションで始まるテレビ番組（ＢＳ２）『あの日ー昭和二十年の記憶ー』が元旦から毎朝続いている。その日の出来事・表裏二頁刷り新聞の大見出し朗読、体験談、日記で構成されている。

メインは体験談で有名人がその日の新聞に目を通して、置かれた立場こそそれぞれ違いがあるが紙面に書かれた記事に関連しての語りである。情報と実感との隔たりを大方が指摘され、辛く苦しかった体験を振り返っている。

六十歳代後半以上の市民一人ひとりにも戦争の体験があると思います。この夏、故郷へ帰省の折には是非父母、祖父母、親戚の方々から体験談を聞いてみる好機となるでしょう。

六十年の大きな節目の年にあたり、本記録集が平和維持に目を向けていただく一助になればと願っております。

目次

私の昭和史（少年編）……橋詰四郎……一頁
祖父母たちの太平洋戦争……前田宗佳……六頁
祖父母たちの太平洋戦争……大木啓輔……八頁
祖父母たちの太平洋戦争……下原良輔……九頁
おに坂……石河孝益……一二頁
終戦復興期の子どもの頃……川松俊夫……一三頁
虐殺Ⅰ……大川孝次……一五頁
虐殺Ⅱ……片又利雄……一七頁
照明弾の光芒……津村節……一八頁
私が書き残しておきたかったこと……江本忠雄……一九頁
学童疎開引率奮闘記……玉岡忠子……二一頁
私たちの少年時代……梅原鎌一……二六頁
戦争で極限を体験……小島逸雄……二七頁
ソ連法廷で政治犯二十五年刑……篠田恒……二九頁
戦争が終り平和になってから……多田久男……四三頁

私の昭和史（少年編）

橋詰　四郎

①今上天皇の生まれた朝

♪日の出だ　日の出だ　鳴った　鳴ったサイレン
　嬉しや母さん　皇太子様　おんまれ　なさった♪

私がこの歌を今も歌えるのは、徹底した皇国民教育の影響だと思っている。１９４３（昭和十八年）年八十六歳で死んだ祖母は、「天子様は有り難いお方で、生き神様だから、平民が天子様を見ると目が潰れるし、軽々しく口にすると口が曲がる。」と、大真面目で話し、それを信じて死んでいった。

※戸籍にも「平民」等、身分制度の差別があった。

私の育った地域では、冬の朝は路地の空地で、誰かが炭俵を燃やし、それに廃材を継ぎ足し、井戸端会議をしながら暖を取る習慣があった。その時、八歳の私も焚火の輪の中にいた。「皇后様、今度は男の子をお願い。」と、合掌しながら祈りに近い大人の会話があった。実に、天皇家は。１９２５（大正十四年）年から１９３１（昭和六年）年までに、成子・祐子・和子・厚子様と四人の内親王に恵まれ、六年間に女子ばかり四人が生まれていたからだった。

市役所は六時、正午、十八時にサイレンで時を告げ、火災発生はサイレンを連続吹鳴し、更に火の用心の意識を高める習わしであった。今回の誕生には一回なら内親王、連続二回なら皇太子と、サイレンで知らせる通達が出ていた。

１９３３（昭和八年）年十二月二十三日朝、焚火を囲む井戸端会議の真っ最中、突如サイレンが朝の冷気を破るかのように鳴り響き渡った。大人達は男子、男子と声を挙げ、合掌し祈っていた。サイレンの音が小さくなっていくと、今度は「もう一回」の大合唱になり、サイレンが再び元気よく鳴り響いた。大人達は皇太子様だと大歓声を挙げ、喜び、踊り狂うとはこのことかと、子ども心に思った。

二度目のサイレンも鳴り止み静寂になったが、焚火の輪はまだ大人達の興奮が覚めぬままであった。その時、何を思ったか私は大人達に「もう一回鳴ったら火事だよネ。ああよかった。」と大声で話しかけた。言った途端、後の大人が「この罰当たり、口が曲るぞ。」と怒鳴り、私の背中を突き飛ばし、私は燃え盛る焚火の中へ前向きで倒れた。助け出されたか、自分で飛び出たかは覚えてはいないが、焚火で霜柱が解けたぬかるみに土下座して、ご近所のみな様一人一人の膝にすがりながら、何度も頭をペコペコしながら、平謝りの母の姿があった。私は二歳の誕生日前に父を亡くしている。喧嘩では負けても勝っても、喧嘩の原因も聞かず、喧嘩をしたたけで。又、先生に叱られたと判ると、先

生様に叱られるようなことをしただけで、裁縫の二尺クジラ尺で叩かれた。
何故かこの時は「火事でなくて良かったネ。」と、言って、叱りも、叩きもしなかった。暫くして、学校で前述の歌を教えられ、歌いながら旗行列や提灯行列をして、神社に参拝し、天皇陛下万歳を三唱した記憶が残っている。

②小学校と高等小学校時代

学校給食はなく、殆どの生徒は弁当を持たず昼ご飯は家に食べに帰った。教科書は全科目「国定教科書」全国同じ。全額保護者負担。教科書を買えない家庭もあり、家庭内やご近所同士の払下げ。払下げ先が決まっているから大切に使えと、使う前から言われることもあった。最初に習う文字は「仮名文字」でなく「カタカナ文字」から教わった。習字は二年生から、最初は「ノメクタ」の文字を書いた記憶がある。小四ぐらいから大全科参考書を買い、私は教科書を学校に常に置いて、通学は鞄でなくノートを風呂敷に包んで通った。登下校は集団でなく、誘い合う子もいたが、それぞればらばらで登下校をしていた。
「書き方＝現・習字」「唱歌＝現・音楽」「図工＝現・工作」「図画＝・現美術」の教科書を買えない生徒が大勢いた。席は二人掛けで隣りのを見て授業は進められ、唱歌は先生の弾くオルガンに合わせ歌い「声」で採点。絵具の筆は日本習字の筆一本だけ。通知評価は全科目「甲」「乙」「丙」の三段階だった。六年生冬の「体操＝現・体育」はラクビーで、級長の「中尾」が笛を持ち審判役、一個のボールを五十人以上で追いかけるから四～五人居なくても判らず、裏門から抜け出し駄菓子屋で焼き芋を食べる楽しみもあった。

③奉安殿

１９３１（昭和六年）年一月十七日、政府は、天皇の写真「ご真影」を各学校に配り。そして「奉安殿」と呼ぶ耐震耐火の建物が学校正門に建立され、その前を通る時は建物に向い帽子をとり、不動の姿勢をしてから深々と最敬礼をするように、先生も生徒も義務づけられた。子ども達は幼児から一目で「男」「女」が判る服装をしていた。男子生徒の遊び「兵隊ごっこ」は、学生帽を普通被りが「戦艦」横被りは「巡洋艦」後ろ被りが「潜水艦」で、戦艦は巡洋艦に勝ち、潜水艦に負け。巡洋艦は潜水艦に勝ち、戦艦に負け。潜水艦は戦艦に勝ち、巡洋艦に負けるルールで、奉安殿が出来てからは、止まって最敬礼をする奉安殿前に追い込む作戦が勝敗を決めるようになり、喧嘩も逃げる相手を奉安殿前に追い込むなど、悪ガキは奉安殿を御味方に、ご利用させて戴いた。

④教育勅語

毎週月曜日の一時限目は天皇陛下に忠義を尽くす教育。日本は万世一系の生きている神様を冠（いただく）秀れた民族だから、劣っているアジアの民族の

上に君臨し大御心を施す使命があると叩き込む教育だった。職員室から教室まで先生は奉書を目よりも高く奉持し静々と歩く。生徒は教室で全員起立して迎える。先生は奉書を高々と掲げ「勅語」と一言。生徒は直立不動の姿勢で頭を下げ、聞こえるのは勅語を読む真面目声と、生徒の鼻をすする音の不真面目音が妙に調和して、笑いをこらえつつ拝聴した。一年生から毎月曜日の儀式で、勅語は先生も生徒も諳んじている。先生は卑怯にも、目より更に高く挙げ、生徒の勅語を聞く姿勢を見ながら朗々と諳んじ、読み終わるや欠伸や手足、体を動かした生徒を前に呼び鞭で叩き、皇国民教育、天皇は生きている神様と鞭で叩き込んで教えた。

兵隊で戦死するのが天皇陛下へ最高の忠義で、最大の親孝行と教えた。小学六年生の義務教育終了で就職する子もいた。男子は丁稚奉公、女子は女中見習いや花柳界に売られていった。先生は自転車、生徒は徒歩、自動車は誰も持っていなかった。朝食は麦飯に味噌汁と自家製沢庵ぐらい。沢庵を食べた屁は鼻が曲がるほどの悪臭を放ちひんしゅくものであった。屁をひった奴は起立し「勅語」と叫び、遊び仲間を起立させ、先生の口調を真似して「朕は思わず屁をひった、汝臣民臭かろう、御国の為だ我慢せよ、鼻をつまんで御名御璽」と、勅語を遊びに取り入れ、鬼ごっこにも採用。捕まりそうになると「勅語」で鬼を起立させ、逃げ切る作戦に利用したが、逃げる奴はハアハア息切れで「朕は思わず…」を朗読し、鬼はその間ニヤニヤ笑いながら静に呼吸を整えていた。

いつの時代も、一人ぐらいアホがいる、教室で臭ってきたと思ったら誰かが「勅語」と叫んだ。私達は反射的にガタガタと音を立てて素早く起立した。担任も「勅語」の大声に直立し顔はうろたえている。「勅語」が終わるや先生は「窓を明けよ」と叫び、窓から身を乗り出して深呼吸をしている。教室を吹き抜けた風で悪臭は飛ばされ、窓を閉め終わると、担任は「他の先生の時は絶対するな」と約束させた。

習字の先生は髭を生やし、羽織袴でいつも威厳を保っていたが、次の動作に移る時「ヨイショ」が口癖であった。この時間にアホが「勅語」と叫んだ。私達はガタガタ椅子を動かし素早く起立した。お髭は何事かと驚きながらも生徒が「勅語」で不動の姿勢なので、ご自分もあわてて生徒に従い直立不動の姿勢を取った。「鼻をつまんで」が終わるや、烈火の如く怒ったお髭は、起立している生徒を席順に、一人づつスリッパで殴り回った。一クラス五十人以上、二十人ぐらい殴り先生は息切れ、半数も殴らず職員室に帰ってしまう。私達は洗面所と教室の間を走り回り、手拭いやタオルを水道水で濡らし、殴られた奴の頬を冷やし介抱した。

暫くして、始業の初めに担任が「今日で君達とお別れです、先生は台湾の高

砂族の子ども達を教えに行くことになりました。」と、言われた。先生のお見送りは、私達はそのような知恵が回らず遊びほうけていた。駅でお別れをしたのは、級長の両親と教頭の三人だけで、コッソリと他人に判ると困るような転勤であったと級長は、お母さんから聞いたと話してくれた。

※台湾・朝鮮半島・占領した国には『鳥居』を建て『宮城遥拝』天皇を拝む皇民化政策を行なった※

更に暫くして、母から思いがけないことを聞かされた。「お前達は何か先生様を困らすようなことをしたのか？。」「お前達のやったことが、警察やお上が知ったら、校長先生や親も警察に連れていかれる。」「騒ぎが大きくなる前に、急いで先生を台湾の山奥へ逃がした。」と言うのだ。

このようにして「勅語遊びは」沈静化していったが、次々と遊びを考え出すのも子どもである。習字のお髭は大の蛇嫌いであることだ。春、秋の遠足は野山を歩くだけだ。「お髭」が引率で参加するものなら、私達は「蛇探しの遠足」だ。蛇を振り回しお髭の周囲を逃げ回る遊びをする。毛皮を満州の兵隊さんに送ると、山裾で全生徒での兎狩りも蛇探しになる。蛇を習字の時間に教室に放つ。などなど相談も、話し合いもしないのに自主的に「お髭」を困らした。

プールも体育館もなく、体育が雨なら教室で自習だ。この時、級長か誰かが、次の習字に使うから、野草の「ドクダミ」十薬を一人十本以上持ってこいと命令した。五十人以上の生徒が持ち寄り、教室の後ろに山のように積まれ、悪臭ぷんぷん頭痛するほど臭いが、それに耐えたのも子どもの幼稚さかと今は思う。職員室でも話題になり、二時限目に入る前担任が、薬草だから教頭先生が欲しいと、終わったら捨てずに、小使室（今＝用務室）に運ぶように。と。

習字は硯に水を入れ、背筋を伸ばし、左手は指を揃え机の端に置き、右手は手首を固定し、墨を垂直に持ち、腕を前後して墨を摺る。この時ドクダミの葉や茎も一緒に摺り潰すから、臭いは更に広がる。お髭は黙って、黒板に大きく『蛇』と書き、この字を自習せよと言って、職員室に引き上げてしまう。それとばかり当時流行の「霧隠才蔵」「猿飛佐助」「真田十勇士」など単行本を静かに読む。担任が、習字の先生が言うには、君達は先生が居ると騒ぎ、居ないと静かになる珍しい組だと言っておられたと、話されたこともあった。

記憶で曖昧なのが高等科だ。小学六年生までは義務制だが。その上に高等小学校が二年制であった。これが義務か半義務か記憶にない。六年生で上の学校へ受験する者十人ぐらい、高等科へ進学しない者十人ぐらい。残りが高等科へ進み、高等科で再度受験する者もいたし、高等科中途退学する者もいた。

級長は、小学四年生から高等科卒業まで「中尾」。副級長は入れ代わってい

た。中尾は桶屋の一人息子で、走れば早い、習字も絵も上手、歌は上手いし、工作も器用、学業も全科目一番。そして勉強はせず私とは別の悪ガキのリーダーもしていた。先生が中尾に師範学校を受験するように勧めた時。中尾のお父さんが「桶屋の息子は桶屋が一番、桶屋に学士様はいらん。」と、言ったと担任が話したことがあった。

桶屋は表戸を開け放ち土間が作業場で、新品よりも修理の方が多いようで、私達は学校の帰り屈み込んで見学し道草の一つにしていた。中尾のお父さんは仕事をしながら良く話しかけてきた。士官学校には志願するな、士官学校は将校になって、人を殺せと命令する威張った人にする。嫌でも丈夫な体なら兵隊にされる。などと独言のように話しかけていた。

仕事場から中尾のお父さんが、藁で作った肩までの深編笠を被せられ、手は後ろ手に縛られ警察に連れて行かれた。中尾が学校を休み、私たちの組は動揺した。どうして捕えられたのか誰も教えてくれない。担任も黙っている。一週間ほどで帰ってきて仕事を始められた。母やご近所の大人達はヒソヒソ話でコワイコワイと話し合っていた。私達子どもは何がコワイか判らなかった。中尾のお父さんは話しかけても、下を向いたまま返事もせず、黙って仕事を一生懸命するだけになった。

遊びは、冬は里山でヒヨ鳥を捕り、駅前の鳥屋で一羽十五銭で売れた。映画は五銭、私は「大森林」と言うカラー映画を見た記憶がある。森の中の大きな湖に飛行艇が飛び着水する映画で、森と湖の真っ青さは今でも覚えている。夏は川で鮒や泥鰌を捕え。秋は墓石を足場に木に登り、通草（あけび）を取った。冬の寒い夜は「寒詣で」と言って夜、商店街が揃って稲荷大明神を巡り、油揚げ・稲荷寿司・かりん糖を供え回る情報を昼間キャッチし、尾行してかりん糖を失敬。翌日学校へ持参し戦果を報告するのも遊びの一つだった。

墓は土葬。腐った棺の上を歩くと、腰まで埋まることがある。中尾が墓場で斜めに切った雌竹が足に刺さり、足に障害が残った。中尾のお父さんが「俺の息子は親孝行だ、兵隊に行かなくてもよい体になった。」と喜んだ。父を知らぬ私は、障害児になっても親を喜ばす中尾が羨ましかった。

そして１９４４（昭和十九年）年、兵役年齢一年繰下げで徴兵。関東軍第六国境守備隊に配属、大元帥陛下直属の兵に。強力なソ連戦車軍団と八月二十一日迄死闘。日本敗戦はソ連軍軍使から知らされ。シベリアではスターリン大元帥。復員し祖国日本ではマッカーサー元帥の命令で四キロメートル以上の行動は事前申告と、三人の元帥に命を翻弄された。翻弄され死んだ戦友のためにも、軍隊編・シベリア編を平和を継続さすために語り継ぎたい。

祖父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生　前田　宗佳

私はこの『祖父母たちの太平洋戦争』で戦争を経験した、父方の祖父の生まれてから、今までのことを書きたいと思います。

この話をしてくれた人　父方の祖父　当時十七歳　現在七十七歳。

私の祖父は韓国の※済州島と言う所で生まれた韓国人です。

※　済州島

済州島は韓国の一番南にある島。面積約１９００平方キロメートル。人口約５０万人の韓国最大の島。

祖父は、祖父の父と母と弟、祖父の祖母の五人暮らしでした。しかし、祖父の父は漁師で、漁をしていて若くして亡くなったため、四人暮らしになりました。しかも、祖父の母は再婚して家を出ていったため、貧しい生活を強いられました。

それで、家族の生活を支えるため、日本の※志願兵として、十七歳で兵隊になりました。船に乗って九州の八幡港へ行きました。そこでは船の中に住み、兵隊の訓練をしたり、※軍需産業を手伝ったりする少年兵をしていました。

※　志願兵

１９３７（昭和十二年）年、南朝鮮総督が日本政府に「朝鮮兵特別志願制度」の創設を提案したことから始まった志願兵制度。翌十三年に４００名を採用し、訓練の上在鮮の日本部隊に入隊させるようにした。その後五年にわたって志願兵を募集したが応募者は初年度の７，７倍から次第に増え、昭和十七年には６２，４倍、昭和十八年には定員が増えたので倍率は下がったが応募者は３０万人を超えた。（当時の朝鮮の人口は約２４００万人）

※　軍需産業

私の祖父の場合は、八幡製鉄所で鉄砲や戦車などを作っていた。しかし、だんだん戦争が激しくなり、祖父は海軍の大砲の弾をつめる兵隊として、狩り出されました。祖父は韓国人であったため、弾をつめるという一番危険な仕事をさせられました。その仕事は、耳の鼓膜が破れるくらい大変な仕事だったそうです。祖父は幸い鼓膜は破れなかったけれど、すごく気が狂いそうなことだなあ、と思いました。

戦争が終わってから祖父は韓国に帰ろうと思っていたらしいのですが、韓国に帰っても仕事がないため、日本に残り働いて弟とおばあさんにお金を送るようにしました。しかし、仕事では「韓国人だから」という差別をたくさん受け

たそうです。仕事ではいろいろ苦労したけど、この時今の祖母と結婚しました。祖父は子どもができた時に韓国人としての民族教育がしたかったため、※民団の小学校を建てることを決意し、民団の人々と設立運動を始めました。

※　民団

民団とは、在日韓国人の組合のようなもののことです。

しかし、それだけでは簡単に小学校は建てられず、民団の人々と設立運動を続けたため、大阪の刑務所に入れられたこともありました。刑務所から出た後も設立運動を頑張ってくれた祖父たちのおかげで※立派な小学校ができました。私も小学校五年生までその小学校に通っていました。

※　立派な小学校

大阪の住吉区にある韓国人学校で現在は幼稚園、小学校、中学校、高等学校があわされている。

今回、祖父からこの話を聞いて、小学校に通っている頃は何も思わなかったけど、今はすごく有難いことだなあと思います。その後の生活でもいろいろ差別を受けました。どんな差別かというと、例えば私の祖父の名字は「金」です。周りの人は、日本人の名字はちゃんと正しく呼ぶのに、祖父のような在日韓国人の名字は「金さん」じゃぁなく、「金本さん」とか「木下さん」などと変えて呼んだり、日本の政府がどこかの会場に韓国人をたくさん集めて※無理やり名字を変えさせたり、学校側が在日韓国人だからといって学校に入れさせなかったり、在日韓国人だからといって兵隊に連れていかれたそうです。

※　無理やり名字を変えさせた。

創氏改名のことで祖父は「無理やり変えさせられた」と言っていました。

私は詳しく知りたかったのでインターネットで調べてみたら、「朝鮮では強制により、約８０％の人が創氏改名した」と書いてあり、無理やりなところもあったけど、「当時朝鮮人、台湾人の中で日本式の姓名に替えたいという希望者が多数いたため、１９４０（昭和十五年）年の紀元節（二月十一日）を祝して日本政府は朝鮮人及び台湾人に日本式の姓名に替えても良いと制令を出した。」とも書いてありました。

私は今まで日本人のようにさせるため、朝鮮人や台湾人の人々の苗字を無理やり替えていたと思っていたけど、本当はそういう希望があったからということをはじめて知りました。無理やりのところもあったと思うけど、「日本の方が悪い」と一方的に決め付けるものじゃあない、とも思いました。

その時代にはこんな厳しい日本人と韓国人の差別があったそうです。このこと以外にも※差別はたくさんあったそうです。

※　差別

祖父は「戦後の差別」について話してくれたけど、多分戦争中の差別のことも言っていると思います。

その頃、北朝鮮では「理想郷を作ろう」という宣伝がたくさんあって、祖父も子どもを連れて北朝鮮に行こうと思ったらしいけれど、韓国の済州島にいるたった一人の弟と離れ離れになるのはさみしいという思いが起こり、断念したそうです。祖父は「今思うと、行かなくて本当に良かった。知り合いもたくさん北朝鮮に行ったが、今貧しい生活をしていると思うとかわいそうだ。」と言っていました。

今、祖父は七十七歳で大坂に住んでいます。戦争のショックも大きいと思うけど、長生きしてほしいです。

◎感想

私は、この祖父の話を聞いて、韓国人は本当に差別で苦しんだんだなあと、思いました。今は前より差別は少なくなったから幸せに暮らせていると思うけど、やっぱり苦しんだ時の心の傷はまだ癒えていないんだなあと、思いました。戦争では、軍艦の大砲の弾をつめる仕事をしたおじいさん、とても苦しかったんだろうなあ。戦争も差別も、もう絶対にしてはいけない、と思います。

祖父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生　大木　啓輔

※（太平洋戦争について、空襲の被害について）割愛しました。

◎平針の祖母の体験談

戦局が危うくなり、満州から日本への引き上げが始まりました。貨物列車に乗せられて、現在の北朝鮮に疎開しました。二、三日経って日本が降伏しました。すぐにソ連軍が入ってきて、私達が持っていた時計や万年筆は取り上げられました。一年後、三十八度線を渡り、仁川から引き上げ船に乗り、佐世保に着きました。満員の汽車に乗せられ（中国から戦争に敗れて帰った兵隊さんと一緒でした。）ました。途中、原爆で焼けただれた広島を車窓から眺めた時は涙が止まりませんでした。名古屋に着いたら、松坂屋もなく、荒れ果てた光景に何も言うことができませんでした。戦争は残酷で、絶対やってはいけないことだと思います。

◎家の祖母の体験談

私達家族は、姉妹六人、弟一人。戦争が始まり少しでも早く引き上げようと満州から戻ることにしました。その途中は想像もできないことばかり。苦労しながらだれ一人死なずにもどりました。父は戦死しました。母は女手一つで大変だったろうと思います。

◎感想

戦争はすごい数の人が死んだりするので絶対やってはいけないと思う。男の人は兵隊に行きたくないのに行かされたりしてひどいと思う。志願兵がいたらしい。今は平和に暮らしているけど、昔のことを知った上で暮らすことが大切だと思った。

祖父母たちの太平洋戦争

高校生　下原　良輔

◎話をきいた人　祖父

《赤紙》

静かな漁村の長崎県五島列島若松島－１９４３（昭和十八年）年一月十二日そこで暮らす下原勇（当時二十歳）に臨時召集令状（赤紙）が届いた。戦争への参加を告げる紙だ。当時の日本では、軍人として国家のために役に立つことが当然のことのように考えられており、軍人へ向けられる尊敬の眼差しも今とは雲泥の差があった。当時は太平洋戦争が勃発してまだ間もない時期－大本営発表（日本軍にとって都合のいいように交戦の結果を勝手に改ざん、それを国民に向け放送したもの）の助けもあって負けるのではないかという危機感はそれほど高くはなかったが、やはり祖父の両親は心配したのであろう、ささやかではあるが祝宴を催したという。

翌日の一月十三日、祖父は赤紙が届いた若者達と共に福岡県久留米市に集められた。そこには多くの群集が集まり、一様に「万歳」「万歳」と戦争へ向かう若者達を鼓舞するかのように万歳を繰り返し、兵士を見送った。その後祖父達は門司（もじ）港へと移動した。輸送船（一般商船、軽武装しかしていない）に乗り込み朝鮮の釜山（ぷさん）港までは約八時間の行程だ。その間、祖父はすし詰めにされながらも意気揚々としていた。釜山港に着いた後、彼らは汽車に乗り朝鮮半島を北上、目指すは牡丹江省（ぼたんこうしょう）東寧県（とうねいけん）の関東軍（中国に根拠地を置く日本軍）基地だ。

《満洲での日々》

祖父が赴任した関東軍基地は中国の東北地方ー当時満州国があった場所であった。当時満州国では戦争は行なわれていなかったが、関東軍はソ連との開戦に備えて訓練を続けていた。午前中は馬術、銃剣の使い方など軍人として必要最低限の技術を学び、午後はモールス通信の仕方や電線の敷設などの仕方を習ったという。（注＝祖父は自分の階級や部隊について詳しくは覚えていないという。しかし話を聞く限り工兵だと思う。）満洲に約二年間赴任していたということだが、そこでの生活状況は決して悪いものではなかったという。食事は主に米と麦の混ぜご飯を主食とし、副菜には肉類が必ず付き、また野菜類も豊富だったという。

《南方へ》

１９４１（昭和十六年）年、日本はソ連と中立条約を結んだため、ソ連が満州に攻めてくるという現実的脅威は一時的に希薄なものとなった。そして関東軍は兵力を次第に南へ移動させていた。特に１９４５（昭和二十年）年に入ると日本軍は各地で苦戦を強いられていたので、そのような状況を挽回するために大量の歩兵を南方へ投入せざるを得なかったのである。その中に祖父もいた。

祖父が乗る輸送船の目的地はフィリピン諸島、今の首都マニラだ。東南アジアにおける日本軍の制海権も１９４５年にはかなりアメリカによって脅かされていたが、途中アメリカ軍の攻撃にさらされることもなく、輸送船は無事にフィリピンへと到着した。祖父が所属する部隊はマニラで一泊した後、ミンダナオ島のカガヤンへと向かった。カガヤンにおける祖父の任務は、当時カガヤン周辺にあった日本軍飛行基地の警備だ。しかし祖父が赴任した頃にはフィリピンにおける日米の力関係が逆転していた。圧倒的な物量の前に、日本軍はなすすべもなく敗戦を続け、祖父も熱帯の密林に隠れ、敵の攻撃をしのがざるを得なかった（ちなみにアメリカによるフィリピン奪回は１９４５年一月）敵の掃討作戦は激しさを増し、時には三十センチの大型爆弾が祖父の十メートルほど手前に落ち、直径数メートルもの大きな穴が出来たという。

爆弾が落ちると、周囲のものを巻き込んで、爆風が作り出される。祖父はその大型爆弾が落ちた際、爆風の中に含まれる鉄くずの破片が首に刺さり大怪我をしたという。密林での日々は飢えと敵襲におびえる日々であった。食べるものといえば、つる系の植物の葉っぱや根などを煮たものがほとんどで、たまに捕まえるねずみや偶然見つけた芋類などは、信じられないことだが「ご馳走」だったという。戦友の中にはマラリヤ（熱帯地方でよく見受けられる伝染病。蚊が媒体となる。）にかかったり、負傷した傷の部位が膿（う）んだりして命

を落とす者が少なからずいたということだ。

《敗戦》

密林での生活を続けて数ヶ月、友軍は相変わらず来ないまま夏がやってきた。熱帯地方の夏は湿気が多い上にたびたびスコールに襲われることもあって生活していくには過酷な環境だ。今日も米軍機が上空を飛び回る。身を隠さなくてはならない。しかしその日、米軍機が撒（ま）いていったものは爆弾でなくビラだった－日本の敗戦を告げる。日本が置かれている状況が悪化していることは、友軍が来ないことからも明らかだった。しかしアジアに覇を唱えていた日本が無条件降伏とは…ショックが全身を襲ったことだろう。三日間、祖父は戦友と相談を重ねた結果、米軍に降伏することを決めた。当時の日本軍では、「生きて虜囚（りょしゅう）の辱（はずかし）めを受けず」という言葉に象徴されるように、敵に投降することは恥という観念が支配的であった。また敵に投降した際には残酷な拷問が待ち受けていると皆が信じていた。そのような中、祖父が投降を決意したのは一つにはビラに投降すれば命は奪わずという趣旨の文言が書かれていたためだという。近くを通りかかったジープに向けて白旗を掲げた。そこで拘束され、米軍の日本軍捕虜収容所に収容された。

《帰郷》

収容所に投獄されてから一カ月が過ぎ、祖父達は日本に帰ることになった。かつて朝鮮に向かった輸送船がそうであったように、輸送船は今回もすし詰め状態であった。１９４５（昭和二十年）年十月、輸送船は横須賀港に入港。夢にまで見た日本だ。祖父は汽車で一路故郷の長崎を目指した。途中で静岡付近を通過、祖父はその時生涯で初めて富士山を見たということだが、富士山を見た時「あぁ、やっと俺は日本に帰ってきたんだ」と、安堵（あんど）感に浸（ひた）り、涙を流したという。

翌日、長崎県の浦上駅に着いた際、祖父は驚きのあまり言葉を失ったという。長崎市街は米軍の爆撃機が落としていった新型爆弾ファットマンにより、焼け野原と化していたのだ。爆弾が投下されたのは八月の上旬であったが、未だ長崎は、郊外で少しずつ復興は進むものの、言葉通り「死の街」であったという。とても静かだったということだ。そして五島列島から祖父を迎えに来た叔父から弟（兼光）の死を知らされる。（弟は長崎の三菱造船所に勤めていた。）五島列島に戻った後、南方で感染していたマラニアが発病、数日間生死の間を彷徨（さまよ）うことになる。しかし馴染みの医師の尽力でどうにか体調も回復に向かい、翌１９４６（昭和二十一年）年には食料難の中結婚、そして地元で養殖関係の水産会社を立ち上げ社長に就任した、その後、息子達に経営を

委ね隠棲（いんせい）、今に至る。

《考察》

祖父は今年で八十三歳になる。戦争を実体験として語ることの出来る数少ない生き証人だ。祖父の話しを聞いていると、戦争というものは善悪の二元論で語ることなどは到底出来るものではなく、様々なファクターが複雑に絡み合いながら織り成す一種のドラマのように思えてくる。確かに戦争は悲惨なものだ。戦場では敵味方関係なしに多数の生命が容易に奪われるし、戦場の環境も過酷という言葉がピッタリと当てはまるような場所ばかりだ。しかし、祖父が語ってくれた体験談には、純粋にワクワクするようなもの、感動する話しも多々あった。満州では戦友達と中華料理（質素で中国の家庭料理に近いものだったという）をお腹が破裂しそうになるくらいまで食べた話、生きるか死ぬかという状況での祖父達がとった行動、共に戦った戦友の死。充実しているとでも言おうか－そうした一面もまた戦争は併（あわ）せ持っているのだ。戦争は起こらないならその方が良い、それは間違いない。

しかし太平洋戦争によってもたらされた結果には意義深いものもあることを軽視してはいけない。日本は、たとえ表面的にせよ東南アジアの解放を訴えたし、日本軍の中には敗戦後も現地に残り地元民と共に欧米列強の植民地支配に抵抗した者達もいる。戦争－それは、理由はどようなものであれ悪であることは間違いない。しかし戦争がもたらした結果について、僕たちはもっと目を向けても良いのではないのだろうか。様々なファクターが絡み合う戦争－祖父は歴史の一端を経験してきたのだ。僕はそのような祖父を心から尊敬している。今回、僕の為に昔の写真を引っ張り出してくれて、長いこと戦争体験を語ってくれた祖父に感謝したい。そしてこれからも幸せに日々の生活を送ってくれることを祈っている。

おに坂

石河　孝益

自宅から五分ほど南に進むと、幅一メートル、長さ三十メートル。傾斜が五十度もある細長い坂道があった。道の両側は廃虚の跡、五百坪から千坪もあろうか旧宅の屋敷が、竹藪と雑木林に囲まれ昼間でも薄暗い坂である。誰が名付けたかは知らないが、通称「おに坂」と言われたこの坂道は、台風や大雨の時は濁流の川になり恐くて近寄れなかった。

今は、コンクリートで砂防工事もされ、近くに三軒、民家が建ち、整った屋

敷があるが、昔のような子ども達の遊び場ではなくなった。

秋。木の葉が紅葉し、晩秋から初冬にかけて落葉がこの坂道に降りそそぎ、三十センチから五十センチの厚さに埋もれると子どもらの出番であった。

初めて行ったのは１９４４（昭和十九年）年、五歳の時だった。四歳年上の姉と、そのお友達数人がいつも仲好しで一緒だった。男の子は自分で工夫して作った手製の竹橇で上手に滑っていた。そう「おに坂」は晩秋になると落葉スキーのメッカになり、子ども達の元気な笑い声で満たされるのだった。

私達女子は、手製の竹ぞりを作れないので、体全体を利用して、お尻や、背中や胸、腹など、それぞれが自分に一番滑れる方法を考え、坂の一番上から滑り下りるのだが、小さな私は二～三メートル滑っては転び、体中落葉だらけ。怖くて何回も滑れないが、それでも歓声をあげて頂上から滑り下りてくる姉達を見ては喜んでいた。遊びを通して、虚弱だった私も少しづつ元気になっていった頃でもある。

滑り下りるよりも転び落ちて、互いにぶっかっても泣いたり、怒る子は誰もいない。上手に滑れる子、下手な子が互いに認めあって、庇いあって、他人のせいにせず遊んでいたと思う。

遊ぶ道具は殆ど無く、大きい子から小さい子まで、思いきり体を駆使し、戯れた幼き日々。仲間同志の「いじめ」や不仲は考えられない日常であった。現代の子ども達は遊びを通して人格形成が不出来であろうか。少年犯罪の数々を知る度に、誠に悲しくなるのは私だけではないにちがいない。

終戦復興期の子どもの頃

川松　俊夫

私は、１９４２（昭和十七年）年十二月に生れた。戦争の記憶はないが、戦争の話を母から聞くと、今生きていることが不思議な気がする。

私は、何も知らずにすやすやと眠っていたそうだ。母が、私を抱えて流し台の下や防空壕に飛び込んだ。戦争中の苦しい生活を母やおばさんからよく聞いたが、戦争が終わっても苦しい生活は続いた。

１９４５（昭和二十年）年五月名古屋空襲があった。Ｂ２９二百機ぐらいによるものである。限りなく落下する焼夷弾によって、名古屋城近辺は瞬く間に火の海と化した。空襲による焼け跡に荷物を運び出し、焼けトタンを何枚もか

ぶせ、重い石をのせた。町は真夜中だというのに、昼間のように明るかった。町は、焼き尽くされていた。見渡す限りの焼野に、高く突き出た風呂屋の煙突が、妙に侘しく思えた。無惨に垂れ下がった電線に、町は足の踏み場もなかった。白いクリームのようなものをべったりと厚く塗った人たちと出会った。火傷の治療だろうか。空襲の凄惨さが生々しく感じられ、思わず息をのんだ。

一、供出物・金属回収令・切符制・配米制。米の供出制へ－戦争の長期化のため、労働力不足・肥料不足などで米の生産力は減退した。米穀管理規則を公布、農家に対して米の供出制実施に踏み切った。

お寺の梵鐘も応召－金属回収令が出され、寺院の仏具、梵鐘などが供出を命じられた。村人に親しまれた梵鐘も、兵士と同じように国のために応召するとして、旗を持ち、見送りをした。

切符制－生活必需品の不足のため、砂糖・マッチなどが切符制となり、衣料も切符制となった。この切符は乗車券・商品券などの有価証券ではなく、貨幣の他にこれがないと購入できないというものである。この制度を切符制という。

米穀通帳と米穀配給通帳制－米は配給制となり、成人の配給は一日2，3合（330グラム）となった。1945年には2，1合に切り下げられ、さらに「七分つき」に、やがて「玄米」へと変化して配給された。

二、代用品

おいもは大切な主食物－米の生産力が減退したため、「さつまいも」の増産となった。「おいもは、お米に負けない大切な主食物です。」という子ども向けの宣伝もされた。

愛国イロハカルタ－戦局が不利になる中で、子どもたちの戦意高揚を図るため、決戦イロハカルタなどが売り出された。1943（昭和十八年）年に大東亜会議が開催されたので「トウア」という言葉が見られた。「シヤウイキシャウ」は戦争で負傷した「傷痍軍人」に与えられる記章のことである。「セウナンコウ」とは楠木正成（大楠公）の子、楠木正行（小楠公）のことである。

日本は最悪の食料難時代へと入っていくが、戦争中を上回る厳しいものがあった。国のためという共通の目標を失った人々が、自分だけは最低の衣食住を手に入れ、とにかく生き伸びようと血眼になっている中で、焼け跡の町には食べる物が無く栄養失調者、家屋疎開や空襲で家を失った浮浪者、親を戦争で殺された子が、戦災孤児と呼ばれあふれていた。

五十銭のこづかいをもらうと、だ菓子屋へ水ようかん、練りあめなどの食べ

物を買いに走った。すべての物が足りなかった。三、四歳の子どもでもお手伝いは、焚く時に使う燃える物（落葉や木）を集めたり、まき割り、井戸からの水くみ、部屋の掃除やぞうきんがけをした。

青空教室－空襲で学校が焼失した多くの都市では、教室不足が深刻で、焼け跡で授業を再開せざるを得なかった。文房具は、四月に買ってもらうと、それを一、二年間は大事に使った。必ず自分の持ち物には、はっきりと学年、組、名前を書いたり付けていた。もしなくしたら、よほどのことのない限り買ってもらえなかった。使っていたクレヨンが折れたら、その折れたクレヨンをなくしてしまったことがあった。それは泣くに泣けない思い出であった。鉛筆は最後まで指でつまむほどの長さになっも使っていた。教科書は、お金を出して買うので紙でカバーをした。でも、新しい教科書を手にした時は、大変嬉しかったことを覚えている。ノートは、最後まできちんと使い、親に見せてから新しいノートを買うことができた。お絵かきや計算などをするときは、新聞広告を切って何枚か束ねて使っていた。

今の私達の幸は、戦争を通して得たもの、戦争の中で人々の基盤として、それが戦後のとまどいの中に磨かれて、新しい方向へすくすくと伸びてきたものだと考えたい。しかし、若くして死んでいったたくさんの命に対して申しわけない気持ちでいっぱいです。

今日も世界のどこかで戦争が行なわれていることを思うと、どうしてもあの苦しかった子どものころを思い出してしまうのです。

虐殺 I

大川　孝次

一昨年の暮れ、地元で平和運動をしている団体に入会した。それは、その年に主催した「戦争展」に感銘を受けたからである。入会の意志を担当者に伝えたところ快く受け入れてくれ、次回の集会の日時と集会場所を教えてくれた。その集会場所が子どもの頃、学校の行き帰りの近道として、お墓の中を利用したお寺の境内であった。このお寺について思い出す事があった。確か、そこは米空軍のB29が撃墜され、パラシュートで降下した米兵のお墓があった所である。

入会の自己紹介と共に、米兵のお墓のあった話をすると、当時を知っている住職である主宰者が急に不機嫌な顔になり、話をそらしてしまった。自分としては何か釈然とせず、引っかかるものがあった。六十年前の事で、おぼろげな

記憶をたどっていくと、当時の出来事がだんだんと思いだされ、何故うやむやにしなければならなかったか理解することが出来た。

既にこの事件は、半世紀以上昔のことであり、全く時効である。今更罪が及ぶことはあり得ない。このような忌まわしい事件こそ、今あからさまにして、人間の弱さを示す事こそ、平和への警鐘として価値あるものではないかと思うのに、平和運動の主宰者の住職が「お墓の話を」うろたえ包み隠そうとしたのが誠に残念な気がしてならなかった。その後、この事件は一体どうなったのであろうか？。全くのヤミのままほうむらてしまったのかと思っていた。偶然にもこのたび、ある篤志家が「名古屋戦乱物語」という本を出版した。そこには全く同様の事件が詳細に載っており、経緯を知る事が出来た。

パラシュートで降下した米兵は、竹槍と木銃で何度も何度も突かれ、叩かれて殺され、子どもが遺体の顔に小便を掛け、その顔に砂をぶっかけたのを、警官は止めようとしなかったと言うことだった。その後、まさか米軍が日本占領軍として進駐するなど思っても見なかったが、米軍２５師団の憲兵隊は真っ先に撃墜事件の真相究明に乗り出した。

事前に虐殺事件の追求を察知した日本側は遺体を誠心誠意、ねんごろに葬ったと言う偽装工作をした。

然し、その偽装工作も米軍日系二世の巧みな誘導尋問に暴露し、残虐行為をした百人余りが、戦犯容疑者としてリストに乗せられた。もし軍事裁判に掛けられたらＢＣ級戦犯として、絞首刑も免れない者も大勢出るやも知れぬ大事件になった。このとき一人の在日ドイツ人が私がやったことだと名乗り出て、加害者をかばい、身代わりとなって危機を救ったのが、南山大学の初代学長のアロイジオ・パッヘ師と言うことだった。この米兵虐殺事件は、兵隊でも警察でもない、明らかに市民が行なった事実である。

確かに日本は半世紀以上も戦争のない日々が続いている。然し果たして平和と言えるのだろうか。先の大戦は軍部という別の人間がやって、我々には関係ないような顔をして平和運動の活動をやっているが、日本軍部とは私達の父であり、祖父であり、祖先がやってきたことなのである。決して他民族がやってきた事ではない。

私が恐れるのは、広島や長崎にしても、あたかも日本は被害者の様に思っているが、何かが一寸狂えば、すぐにも加害者になる危険性を常にはらんでいる事である。戦争がないから、平和だから、日本は平和を愛する民族だと思っていたら大間違いである。社会弱者の偏見や差別などは平然と行なわれているのが現状である。戦争の悲惨さを語り継ぐことも勿論大切ではあろうが、それと

共にこの「虐殺」が非戦闘員である市民の手によって、子どもも巻き込んだ事実を真摯に受けとめ、隠蔽、隠すことなく、これも又、戦争の恐ろしさの一つとして、伝え語らなければならない戦争悲劇ではないかと思うのである。

然し、二度と戦争の悲劇を繰り返さないためならば、自らの命を賭して虐殺の加害者である日本人を、人種や国籍の壁を乗り越えて日本人を救ったアロイジオ・パッヘ師のような「人間愛」「人類愛」なくして平和は訪れることはあるまいと言う事である。戦争が起こしたほんの身近な事件かも知れないが、見逃してはならない、平和への大切なものが含まれているように思われてならないのである。侵略を正義化し戦争犯罪を隠しては、アジアからの反発は必至である。

※編集者追記

※知っていますか竹槍持った日。１９４４（昭和十九年）年八月四日「国民総動員令」を発令し、「米兵を一人でも刺し殺せ！」と婦女子の竹槍特訓が強制的に始められた日。Ｂ２９の中京地区空襲は昭和十九年十二月十三日８０機に始まり、名古屋城が焼失した空襲日は昭和二十年五月十四日であった。

虐殺Ⅱ

片又　利雄

私達六十名は日本から、北満国境（現中国東北）の最前線、第六国境守備隊歩兵六中隊に１９４０（昭和十五年）年三月配属された。

一日目。

到着した日は「お客さん扱い」で食事の準備も後片づけも免除。所謂上げ膳据え膳、入浴も一番最初。明日の起床ラッパから帝国軍人の精鋭「関東軍魂」を叩き込んでやる「覚悟せよ。」と、訓辞され第一夜の眠りについた。

二日目。

背嚢を除く完全軍装で「一本松」と呼ぶ戦闘訓練地へ、そこには白樺の大木に立ち姿で、目隠しなしで縛られている屈強な中国人がいた。貴様達に度胸を付けさせてやる順番に突け。六十名全員は震え、怯え、足がガクガク倒れる者も出た。次々と銃剣で刺され、殺される人間の悲痛な腹底からの唸り声、刺される剣を渾身の力で掴み防ごうとする動き。日ソ戦で死闘を繰り返した修羅場を体験しているのに、平成の今も夢でうなされるはこの場面だけで、死ぬまで続くと覚悟しています。六十五年前の出来事で法律では時効で許されても、私の心には時効がないのです。二人の兵は怖がってとうとう突くことが出来ず。命令違反だ処分は後で示すと数回殴られ「本日の作戦はこれで終り」。

三日目。
六十名全員、銃剣術訓練で整列する。昨日突けなかった二名が呼び出され、五十八名は円陣を組み見学することになった。四人の下士官対二人の銃剣術合戦が始まり、二人は滅多矢鱈に突きまくられ、忽ち気絶して医務室に担ぎ込まれ、即入院、翌日死亡。なぶり殺され戦病死にさせられた。戦病死は靖国神社に合祀されるので、天皇に忠義の最高級の親孝行者と賞賛されるのだ。
私達五十八名が陣地の窪みで茶毘に付しながら「明日は我身」と骨を拾う。このようにして普通の「ヒト」が軍人精神で天皇陛下のために、人殺しに改造させられていく、生き残りたい者は、そのスピードに乗り遅れるなと、考える余裕も暇もなく必死に付いていくだけだ。

それから四日後。
五十八名の内から二人が逃亡する。前は黒龍江後は小興安嶺山脈、集落もなく簡単に憲兵に逮捕され、陸軍刑務所に送られていった。二人は良心に従い「ヒト」としてよく考え、狂気の殺人集団を自分の命と引換に拒否したのだ。
しかし、その代償は余りにも大きかった。帝国軍人の裏切り者、天皇陛下への反逆者のレッテルを貼られ、最前線国境の守備隊なので、格好の敵前逃亡罪にされ、見せしめも含め銃殺された。残されたご家族は地域社会で生活できるかと話し合った。

私達の前を引かれて行く姿は、階級章は剥ぎ取られ、上着のボタンは全部取られ、スボンの紐まで取られ（軍服のスボンはベルトでなく紐で結ぶ）素足にスリッパを履かされていた。その顔は人殺しから解放されたのか、ホッとしている落ち着きがあった。
夢にうなされて起こされては思う。軍国主義のあの時代に、あの四人が本当の「ヒト」ではなかったのかと、お互いの名前も覚える暇もない、僅か一週間の間の出来事であった。残った五十六人は、私も含め「死」の恐怖に怯えながら、超一級殺人者に仕立て上げられていった。

照明弾の光芒

津村　節

長い間の疑問が解かれる様な言葉が耳に入ってきた。知多市、ちた塾の『仏教美術』講座。「敦煌の石窟寺院について」の講話の中で、講師の木村昭三先生が「京都を守った、有名なアメリカのワーナー博士」という事をふと洩らさせられた。その言葉が強く脳裏を駆け巡った。

たまたま、その頃「敗戦国民の精神史」なる本を拾い読みしていた。その中に、東京都立川市付近で１９４５（昭和二十年）年六月、空の要塞Ｂ２９一機が墜落した記録がある。その機長が携帯していた資料には、日本軍幹部や憲兵隊員がチェックしたが、書かれている内容は日本の神社、仏閣の事らしいがどうも要領を得ないので、国立博物館の学芸員を集め研究させた。すると驚く事に、京都、奈良は勿論の事、日本全国の貴重な文化財、史跡等が洩れなく記載され、これらは日本人だけではなく、人類の大切な文化遺産であるから、爆撃をしないように書かれており、この資料を作成した人物はアメリカ人のワーナー博士であると判明したのである。

先に、私の綴った「照明弾の光芒（Ｉ）」で郷里栃木県足利市が、昭和二十年八月十三日無数の照明弾を落とされながら、爆撃を免れた不思議さが、ワーナー博士の資料に結びつけると、今までの疑問が解明されて行く様な思いがしてくる。又、同じ頃、作家森村誠一氏の「生きている証し」のエッセイに関連する一章を見つけた。森村氏の郷里は埼玉県熊谷市で、足利市とは直線で二十キロメートル程度しか離れていない。その熊谷市が足利市に照明弾を落とした次の日、八月十四日～十五日に掛けて空襲され、市街の七十五パーセントが焼失した惨禍の様子が赤裸々に描写されている。

天皇が終戦宣言をする数時間前に、この非情な熊谷市爆撃に驚愕唖然とした。京都、奈良は厳然として爆撃されなかった事実。我が郷里足利市は奇跡であったのだろうか？。この一つ一つの事実の断面を線として結びつけて行くと、興味がますます増幅されていく、私が古希を無事に越え「生」を戴いている事は、博士の資料と全く無縁ではない様に思えてくる。木村昭三先生に直接問うと、何と驚いたことに、奈良法隆寺にワーナー博士の「墓」が現存しているという。一日も早くスケジュールを調整して法隆寺の墓前に参り、手を合わせたい衝動に駆られている。

ちなみに人名辞典で調べてみるとＷａｒｎｅｒ・Ｌａｎｎｇｄｏｎｎ（米）東洋美術研究家。とあり著書に「不滅の日本美術」他とある。

私が書き残しておきたかったこと

江本　忠雄

①不意に背後から

不意に背後から敵の銃撃をうけ、戦友が腹部貫通で倒れた。身を伏せ友に近づく、弾の抜けた前腹部から腸が、風船のように飛び出ていた。とつさに私は

部落からボロ布を持ち、その鉛色の腸をおおつた。そして板戸にのせ後送を託した。幾日も経ずして友の死を知る。私は断片的だが未だありし日のことを想う。

②悲壮な想い今も消えず

敵はきわめて果敢にして、失敗するも毫も意とするところなく突撃を反復し、遂に台上に駈上り、その一部数名は友軍機関銃に取り付き機関銃の争奪始まれり、機関銃小隊長日比野曹長は機関銃を取られてならじと白刃を振るい敵中に切り込む、ここに壮烈な白兵戦展開されり、中国湖南省塔嶺及び石沖附近の攻防なり、遠い日のことなれど悲愴な想い今も消えず。

③この旗に捧ぐ

奇しくも私は青春の五年間をこの旗に捧ぐ、人間の生死の究極のドラマを味わう、八十三歳を迎えるいま感慨深いものあり。この旗は明治二十九年騎兵第三聯隊編成に当り拝受されたるもの。その勅語、奉答の原文をしるす、

語　騎兵第三聯隊成ヲ告ク仍テ
今其隊旗一旒ヲ授ク汝軍人
等協力同心シテ益威武ヲ宣
勅　揚シ我帝国ヲ保護セヨ

答　敬テ明勅ヲ奉ス臣等
死力ヲ尽シ誓テ国家
を保護セン
奉　明治二九年十一月十八日

④　一片の灰燼となる

終戦となり軍旗を中国軍に渡してはならじと軍令あり、聯隊は安徽省池州県家涵西方三キロ揚子江岸の近く、小丘の平原にて奉焼す。仰ぎ見る軍旗は金色燦然とし喇叭の吹奏は余韻嫋々とし物悲しく、勇敢奮闘した将兵の感極まる嗚咽聞える。軍旗は紅蓮の炎に包まれ一片の灰燼となる。拝受以来五十年戦史の終焉を告ぐ、頭徽の菊花章は揚子江の江底深く沈めたり。

※編集者追記

※陸軍は軍旗、海軍は軍艦旗。共に天皇の姿と仰ぎ死守した。年に一度軍旗祭を盛大に行ない一層忠節を誓う行事を行なった。然し編集者の属した守備隊には軍旗は下賜されなかった。理由は敵に奪われる公算が大きいからであった。

⑤虜囚として

１９４５（昭和二十年）年九月五日聯隊は集結地鎮江に到着せり。指定せられし華中蚕糸公司の旧建物に収容され不安のうちに虜囚としての集団生活を始めり。鎮江は昔遣唐使華やかなりし頃弘法大師が留学せし名刹金山寺の地なり、夕方になれば鐘の音きこえ望郷の思い切なるものあり、「金山寺味噌」発祥の寺なり。１９４６（昭和二十一年）年二月九日中国人の罵詈雑言を浴びつつ祖国に帰還すべく収容所を後に一路上海に向かえり、

学童疎開引率奮闘記

玉岡　忠子

１９４１（昭和十六年）年十二月八日太平洋戦争が始まった。１９４４（昭和十九年）年三月夕刊廃止。宝塚歌劇団も享楽追放で廃止させ劇場の椅子を取り外し大広間にし、和紙と蒟蒻で大風船を作り爆弾を取付け「神風？」を頼りに飛ばし、アメリカ上空で爆発さす「風船爆弾工場」にした。娯楽は影を薄め代りに「撃ちてし止まん」「鬼畜米英」「一億火の玉」などのポスターが方々に貼られて戦時一色であった。

この年の八月、私は暑い太陽の光を浴び名古屋市東区の古新国民学校の校庭に立っていた。六月十五日に米軍がサイパンに上陸。連合軍の反撃が本格化し八月四日、国民総武装令が発令され「米兵を一人でも刺し殺せ」と婦女子に竹槍訓練をやらせた。

空襲から学童を守るため学童疎開が始まった。本校も一、二年生は団体生活が無理なので縁故疎開を、縁故先がない児童は親元から通学になり、三年生から六年生まで、縁故疎開の出来ない児童は行政が指定した町村へ学校単位で、教師と共に避難生活をして教育の場となる。第一団は八月上旬に出発し、岐阜県揖斐町の三ヶ寺。大和村二ヶ所で合宿生活をしていた。この度は第二団である。男子はゲートルを巻き防空頭巾姿、女子はモンペに防空頭巾、それぞれにリュックサックを背負っている。出発の合図と共に教師と児童が動き出した。不安げに先生頼みますよと祈るように訴える親の視線が痛く感じていた。子ども達は家族と離れたくない、泣きたい気持ちを一心に抑え、うつむきかげんに列から遅れまいと歩き出した。戦時下なので子どもでも女々（めめ）しい振舞は許されなかった。

大垣駅に着いた頃は真夏の太陽が強烈に照っていた。ぐずぐずしている児童を追い立てるように揖斐電に乗換。大理石の採掘で有名な赤坂駅を通過した時、私の家の応接間の床が赤坂の大理石だったと少しセンチメンタルになっていた時、突然ウーウーと空襲警報のサイレンが鳴り響いた。心の不安を打ち消すように大声で騒いでいた車内は、一瞬静かになってしまう。疎開先を目前にして空襲とは驚きながら、神様どうか無事に早く揖斐に着きますようにと一心に祈った。やがて警報が解除になりほっとした。揖斐駅から疲れた足を引きずりながら、だらだらと約十分ほど歩いて、ようやく本部のある長源寺に着き男子児童を引き渡し、女子は新しく女子寮になる昭和寮に向かった。

昭和寮は元芸者の検番で、揖斐町の小さな川のほとりにあって、いかにも色街という感じであった。日本家屋のこじんまりとした二階建で、二階は舞台と大広間、一階は幾部屋もあって二十二才の私と先輩の松本教師の部屋、本部を当寮に移し教頭が常駐する部屋、台所、食堂等である。炊事洗濯等は、地元で採用した中年のおばさんがしてくれる。女子一人の持ち物は、上下の布団各一枚と、行李（こうり＝衣類を収納する蓋付きの容器）一個の衣服と学用品である。先に送り到着していた。それらを舞台に作られた棚と押入に整然と納める。夜は大広間に三十余名全員が一枚の敷き布団に二人一組になって寝る。着替えは行李から出し行李に納める。洗濯した衣服も正しく畳んで行李に納める。八歳の三年生でも共同生活なので脱ぎ捨てることは許されない。五、六年生に慣れるまで手助けをさせ教師はそれを指導する。

授業は、揖斐町、大和村の国民学校の一部を借り、各寮にいる二人の先生のうち先輩の先生がする。私のような若い先生は寮母的な役割で寮に残り仕事をする。校長は名古屋の本校に、教頭は疎開地の責任者。教頭と松本先生は同郷なので、学童疎開の本部を長源寺より昭和寮に移し、毎日昼頃出勤してすぐ帰宅される。（家族全員揖斐町に疎開）１９４１（昭和十六年）年四月一日に、米穀配給通帳制が実施され、成人で一日三百三十グラム（約二合三勺）である。全員米穀通帳を役場に提出した。

朝は身仕度を済ませ、掃除をしてから食事になる。中皿に南瓜のお粥があるのみ。昼は大豆の油を絞った大豆粕が一皿。夜は固めの南瓜のご飯で副食は殆どない。いつも空腹で辛く悲しく、栄養失調になった私は生理も止まり、虫に刺されたあとが化膿し治らず、今もその傷跡が残っている。成長期にある子ども達は私以上に辛く空腹に耐えていたに違いない。

男子寮の大和村の下善明寺では、私の一学年後輩の川島先生（女）は、地元の人の指導で畑を借り、六年生を中心に農作業で野菜を栽培したり、山で枯枝を拾い豆腐屋の燃料にし「おから」と交換し、児童の栄養確保にと苦労していた。しかし昭和寮は町の真ん中で女子寮なので不可能と思ったし、町の人に交渉して補給する考えもなかったし、努力もしなかった。

疎開児童の一番の楽しみは、月一回の保護者との面会日である。どれほど親子共々待ちかねていたことか、広間で親子向き合って乏しい配給物資を、また今日のために闇市で、法外に高い代償を払って手に入れたと思われる食べ物を子どもに食べさせていた。煎った大豆など保存のきくものは缶に入れて渡していた。行李の衣服を入れ替えて保護者は帰っていく。教師は月一回本校へ連絡

のため名古屋へ帰ることができた。

学童疎開で新しく入ってくると、荷物を調べ身体検査をし、衣虱がいると直ぐ煮沸しなければいけない。油断するとアッと言う間に寮全体に蔓延してしまう。男子は坊主刈りで毛虱はいないが、女子は耳にかぶっている毛を手のひらで上へ持ち上げると、ピカッと小さい小さな虱の卵が付いている。ゴム手袋をして水銀軟膏を頭全体にべっとりと塗り、上からタオルで頭髪を包み、暫くして洗髪して退治する。登校し他の子から貰ってくることもあるから、時々抜き打ちで検査をしなければならない。揖斐の夜は北極のように寒い、洗濯物を夜つるすと直ぐかちかちに凍るほどだ。衣服の虱は凍って死んだと思い安心していた。ところが衣服を身に付け暖かくなると、もぞもぞと生き返るのだ、虱は寒さに強く、根絶は煮沸しか方法はないことを教わった。

１９４５（昭和二十年）年一月十三日、三年生の子が発熱し病院へ連れていく、単なる風邪と診断され一安心する。昭和寮に帰る途中に女子寮の大乗寺に、子どもを先に帰し寄る。寒いので炊事場で火に当たりながら林先生と地元の作業員とで雑談中、突然、三時三十八分ぐらっと地震が来た。火を消し外へ避難しょうとするが、揺れていてなかなか出られない。這うように出ると本堂の前の庭の杭に、ご院主様がしがみつき、その後ろに奥様、その次にと三人が杭が揺れる度に三人が揺れている。本堂の屋根は重いのでギーギーと不気味な音を立て左右に大きく揺れ、今にも倒れるか潰れるかの勢いだ。暫くして収まりほっとする。これが三河大地震だ。「Ｍ七・一死者６１７２人」一カ月前の昭和十九年十二月七日の東南海地震は「Ｍ八死者４０８７人」二つの地震は戦意に関係するからと簡単に報道された。終戦を早めたと言われるほどの大地震であったが私達は詳しいことは知らされなかった。

同じ名古屋市から学童疎開しても、受け入れ先で大きな違いが生じ、知多半島へ学童疎開した学童は、地元の人の好意で銀シャリ（百％白米のご飯）だよと、風の噂で伝わってきて羨ましかったが、地震では震源地に近くお寺が崩壊して大勢の疎開児童が犠牲になったという話が聞こえてきた。

雪が積もる揖斐は学校行事で雪中行軍が行なわれ、疎開児童も参加しなければならなかった。地元の児童を先頭にゴム長靴、または藁で編んだ雪沓で雪に対し足下は完全装備だが、疎開児童は配給で当たった布製ズックにゲートルを巻いて参加する。行きはよいよい帰りは怖いではないが、布靴は水がしみ込みべとべと足先も、手も真赤にはらして帰ってきた。それに霜焼け、あかぎれが児童を泣かせた。あかぎれは皮膚が裂け血が滲み出て痛く、霜焼けは最初は痒

く、やがて皮膚が破れ血膿が出て春まで治らない。今このような子は一人もいないから、いくら話しても理解して貰えないと思っている。

空襲警報が発令されると、夜中の暗闇の中で子ども達は素早く荷物棚の処へ行き、もんぺをはき防空頭巾を被り整列する、それが五分とかからない。夜、岐阜市や名古屋市の空襲では、焼夷弾が次々花火のように落ちていく、すると地面がぼうと赤く炎が燃え上がる、それを私も児童もただ無言で見ているだけだ。

昭和二十年三月十九日名古屋の空襲で、三年生の高橋専一郎君のお母さんが爆死したので連れて帰るように連絡が来た。早速男子寮に行き理由を言わず、今直ぐ先生と名古屋へ行こうと外出着に着替えさせた。専ちゃんは何故僕だけと疑問を持ったらしい。日頃元気な専ちゃんは一言も喋らず、黙々と付いてきた。私はどう切り出してよいか悩みながら切り出せず、揖斐電、東海道線と乗り継ぎ名古屋に着き、市電で家に近い山口町で降り、今ここで言おうと決心したが、専ちゃんの顔を見ると言葉が出ない。とうとう専ちゃんの家の近くで事情を説明した。専ちゃんは何も言わなかった。

ご遺族の話では、夜、空襲警報が出て、お父さんは戸締まりをして避難するからと、一足早くお母さんを徳川園へ逃がした。逃げる途中照明弾が次々と落ち真昼のように明るくなった処へ、爆弾や焼夷弾がどんどん落とされて多くの人が死に、その中の一人が専ちゃんのお母さんであったと言う。ご近所の人であろうか、専ちゃんを見て「専ちゃんよう来たね・・・」と、手を取り家の中へ入れようとしたが、専ちゃんは戸にしがみつき入ろうとしなかった。入ればお母さんの「死」を認めることになるからだと私は汲み取った。私はお悔みを申し上げ、ご冥福をお祈りさせて頂いてから、古新小学校へ寄った。先生が講堂に空襲で死んだ人が大勢安置してあるから、見ていきなよと言われたが、私はその気にはなれなかった。空襲下の人々は嫌でも死に慣らされているのだと思った。

昭和二十年四月教師配置替えで、大和村の下善明寺に移った。ここは男子寮で四十歳代の渡辺女教師と私が担当である。子どもでも男子には強さがあった。本堂の縁側で五、六人集まって「がんばれ、がんばれ、負けるな、そこだ！」と大声で応援し、大喚声も聞こえてくる。覗くと、腹を真赤に膨らませた白い生きもの「虱」を二匹向かわせて相撲を取らせたり、二匹を走らせ徒競走の運動会をさせ応援しているのである。私が初めて虱を見た時は震え、背筋を悪寒が走り、立ちすくみ、声も出ず後退りしたが、私も強くたくましくなり先頭

に立ち、生徒を指揮し命令し風呂を沸かせ衣類を煮沸させた。初めは衣類の白色から始めたが、あまりにも沢山あるので色分けをせずに煮沸速度を早めた。干場が足らず何本もロープを張り巡らし干した風景は誠に壮観で、女子寮では体験出来ない痛快さを経験させて頂いた。

ここ下善明寺は本堂で寝るのである。朝、布団を隅に収め掃除をし、仏様の前に集まる。ご住職がみえて本願寺の正信偈、帰命無量寿如来、南無不可思議光と読経が始まる。私は禅宗だが努力して覚えたが、子ども達は初めは唱和しているが、途中から私一人が代表で唱和する。子ども達の荷物は本堂の裏の通路に竹で棚が出来ていてそこに置く。空襲警報が鳴ると本堂から裏に回り、ゲートルを巻き防空頭巾を被って素早く整列する。

小水は大きな甕が埋めてあり板が二枚渡してあり、そこで用をたす。夏休みになり児童と魚釣りに出かけた。茂った草むらから蛇が農道を横切ろうとしている。びくっとして立ち止まる。地元の人は蛇は野鼠を捕えるので大切にし、蛇を優先させ横切るのを静かに待つ。蛇は悠々と目の前を横切り小川も泳いで横断して行った。蛇の足は、歩く走る、泳ぐ、垂直に登る、逆さまに降りるなどとどうなっているのだろう。上善明寺では蛇がピアノの上で「どくろ」を巻いていた。

夏休みだ。蝉は夜明け前から喧しく鳴き、本堂で児童は五目並べ、挟み将棋、本将棋などをしている。将棋は六年生になると強い。たまに私も参加するが先生の面子（めんつ）で勝ちに急ぎ苦戦することもある。予科練の歌、同期の桜等軍事色の強い歌をよく歌った。男子寮は女子寮と違って活気があった。八月上旬何時ものように遊んでいると突然、陸軍の下士官が二人来て「日本国で、日本海と太平洋を結ぶ一番短い地点はこの地である。陸軍は日本を二分するこの地に駐屯し米軍を迎え撃つから、学童は他の寮に移れ。」と命令した。私はここ下善明寺の生徒を他の寮に引き渡し、夏休みなので一週間の休暇を申し出、父母が縁故疎開している岐阜県加子母村へ行った。

空襲はますます激しくなり、米軍が上陸してきたら竹槍で刺し殺せときつい訓練をさせられ、男子は道路に出ている木の枝に登り、下を通る米軍戦車に飛び降りて殺せと訓練をさせられた。一億国民総武装、大和一致と鼓舞しているが、国民に正しく戦況を伝えているか疑問に思っても口に出せないほど追い込まれてしまった。日本の負けを知らされたのは加子母村であった。

奉職先の古新国民学校は名古屋城と同じ日に焼失した。五月十四日である。私は私に任された疎開学童を一人も死なせなかった。これが私の誇りである。

私たちの少年時代

梅原　鎌一

軍国少年で育った私達の世代は、終戦を境に体制が大きく変わり、全く逆の生き方をせざるを得なかった。ちょうど、中学生時代の時に感受性の強い年頃で、よくも対応してきたと思う。昭和史をみても、昭和の初め頃にその前兆があったかも知れないが、特に日常生活に影響するようなことはなかった。

１９４０（昭和十五年）年「紀元二千六百年祝賀式典」をひとつの節目として変わり。翌、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争開戦という史実を生み出し、その後の日本を大きく転換させた出来事となった。私も昭和十七年入学試験に合格し、希望に燃えて中学生となった。戦前、戦後を通じての学園生活こそ、人生に強く印象に残っている時代だったと思う。そのスタートさせた昭和十七年四月十八日、私達は近郊へ遠足に出かけた（当時は行軍といっていたかも知れない）その午後、米軍機による初の本土空襲があった。東京をはじめ、各地に銃爆撃を加えながら去った。当然名古屋の空にも飛来したが、散発的なもので私達も特に怖さを感じなかった。

戦時色が濃厚となってきた頃、翌年二年生となったが「英語」が敵国語ということで、授業課目からはずされた。その代わり「教練」といういかめしい課目が設けられた。先生は軍人で、士気の高揚を高める軍事教育である。昭和十九年の秋から私達も軍需工場へ学徒動員され、通学することができず、この日から勉学の途を閉ざされた。中学生でも、交代で夜勤を体験したことがあるが、その辛かった思い出。我慢してよく頑張ったと思う。これも時代の中で成長した若人の心情だったのだろうか。夜勤はなかったかも知れないが、女学生も私達と同じように軍需工場などへ学徒動員されるという激動の時代に入っていく。私達のクラスメートからも「予科練」に志願した者がいたが、幸い内地だけの訓練に留まっている内に戦争が終わったので、戦後まもなく学校へ復帰している。こんな頃、都会に住む小学生達は、親元から離れての学童集団疎開によって、苛酷な体験をしている。当時の戦況に一喜一憂しながら、私達の日常生活はますます窮乏の時代に入っていく。生活に必要な物品の需給は厳しく「欲しがりません勝つまでは」のスローガンのもとに、日用品、食料品など配給制度が実施されていた。

折しもＢ２９による空襲も激しくなってきた。軍事施設のみならず、都市への空爆も大都市から地方中都市へ拡大するようになった。私達名古屋でも昭和十九年十二月、主目標となった大手軍需工場が爆撃されたが、以後、数多くの

空襲に遇っている。その中でも、翌年の三月十二日と十八日の夜間大空襲は全市的に大きな被害をもたらした。防空頭巾を被り避難のため逃げ回ったとき、空を見上げれば堂々と編隊を組みながら飛んでいるB29を直視しながら……頭の上に敵機が、思うことは恐怖感と無気味な情感を抱いたことで、いまもって脳裏に浮かぶ。私達の住む周囲一帯は直撃こそなかったが、市街地の多くは戦災を受け焼野原となってしまった。警報のサイレンと共に逃げまどう市民、毎日が戦場に近い状況の中で過ごした日々の記憶は生々しく残っている。

八月六日広島、九日長崎への原爆投下による悲惨な史実は今も語りつがれている。これより少し前の四月、米軍上陸によって沖縄は住民を巻き込んでの戦場となった。六月下旬、沖縄守備隊の全滅に至る間、沖縄決戦の惨禍。この中でも「ひめゆり部隊」の痛ましい悲劇はいつまでも歴史上に留められるであろう。また南九州知覧から飛び立った特攻隊についても、その時代、軍国主義の中で教育された若者達が祖国日本のために散った。この特攻精神の悲劇こそ「昭和史」の中でも壮絶な記録として語り継がれるであろう。沖縄戦から広島、長崎への原爆投下など緊迫した時の流れに、戦争終結への「ポツダム宣言」受諾に拍車がかけられたことはいうまでもない。八月十五日ポツダム宣言受諾の終戦詔書（玉音放送）により戦争が終わった。「戦争終結」この終戦こそ昭和史の分岐点となったし、この日をもって時代は大きく変化する。

戦後、学校へ復帰して授業再開。運動場は私達の遊び場所でなく、芋畑に覆われていたことが印象深く残る。そして英語の授業も始まった。さあ学力を取り戻さなくちゃあ……と奮起すれば、ここには戦後の食料難時代が待っていた。すっかり焼け跡になった街々には闇市が並び出した。戦災孤児、復員、引揚者、特攻隊くずれ、ガチャマン、コラセンなど……戦後の様々な風俗の中ではあったが、人々はひたすら生き抜いた。しかし平和な時代を迎えたことが、こんなにも幸せであろうか、と思ったのも事実である。

戦争で極限を体験す

小島　逸雄

今年は戦争が終って六十年目だ。平和の今こそ、私の体験した戦争の残虐さ残酷さを伝え、平和の働きに役立ててほしいと思い筆を執った。私は1944（昭和十九年）年四月一日陸軍通信連隊に甲種合格現役入隊。四カ月後の八月四日、門司港からフィリピンに向かった。船は一万トン級輸送船三十隻、護衛駆潜艇六隻、護衛航空母艦一隻、計三十七隻の大輸送船団で、敗色濃いフィリ

ピン戦線挽回を狙う大本営の意気込みが感じられたが、制空権、制海権も米軍の手中にあり三十七隻中、空母一隻、輸送船十二隻を失う一方的な大敗北を受け、膨大な兵士が無抵抗で溺れ、海の藻屑にされ、救助もせず逃げるようにマニラ港に入港したのは、門司港を出港して僅か十八日目であった。

米軍レーダーは鋭く、兵の移動は陸も海も夜に限られていた。マニラに一カ月滞在し、ネグロス島第四十九飛行場中隊へ三百五十名の配属が決り、九月二十四日六千トン級の貨物船で護衛艦もなく単独出港した。今回の輸送船は清潔感があり、必需品を枕元に置き、久しぶりに緊張感もほぐれる船旅を楽しんでいた。と翌朝明るくなると爆音が聞こえたと思ったら空襲のサイレン、敵戦闘機が列をなし次々と急降下、爆弾投下と同時に機銃掃射。応戦は船舶高射機関砲手に任せ船倉に避難した。爆弾が次々命中し、全員退船のサイレンが鳴り響き、甲板から見下ろすと思ったより高いが我先に飛び込み、私は海中で身に付けていた装備を外し、船から少しでも離れるように必死に泳いだ。船は「凄い音」を発し横転その反動で転覆。真っ逆さまで沈没した波のうねりで、船に近い多くの戦友が吸い込まれるように沈んでいき、私は現地人の木造船に救助された。このように私達は米軍とまともに戦う前に手痛い打撃を何度も受け、犠牲者を増やし戦力を消耗しつつ最後の目的地にたどり着いたのが十一月二十六日であった。

飛行場が爆撃され滑走路に穴があくと、村人の財産である椰子林から椰子の木を三十本、五十本と無断で切り倒し滑走路を補修する。村人が栽培している農作物は「現地調達」と称して勝手に収穫するなどを繰り返していたが、米軍の猛攻に後退し、私達は米軍の上陸に備え山岳地帯に陣地を構築し待ち構えた。１９４５（昭和二十年）年三月二十九日米軍と戦闘を交えたが、敵の豊富な優れた武器の前に敗退を繰り返し、最後の戦法として「夜間切り込み隊」を決行したが、これも事前に察知され、真昼のように照明弾に照らされ重火器攻撃を朝まで受け、出撃した切り込み隊は損害を一度も与えず生還もしなかった。このような状況下で私にも『死』の出撃命令が下った。死を覚悟していざ出陣の時、有線通信破損修理命令が来て、通信兵の私を下士官が護衛して修理に向かった。修理は三日ほどで終り戻ると、出撃した切り込み隊全員戦死の知らせを受け、生と死を分ける『命の紙一重』を痛烈に感じ唯唖然とした。

敗け戦は何をやっても成功することなく、米軍の攻撃に夜も眠れず疲労と栄養失調でバタバタ倒れ、食べる物がないので、軍隊と言えども生きたい一心で、動ける内に生き抜ける場所を探そうと十五名で逃亡する。二日かけて山を下り、集落で念願通り美味しい食料にありついたが、村人の襲撃を受け一目散に

逃げる途中ではぐれ私達は三人だけとなる。私達の武器は兵隊なのに竹槍だ。私達三人は山麓地帯で生活するも一人が死んでしまう。二人で埋葬しいつ迄もこの場所に住めず、情報も判らず、二人では寂しさと不安がつのり中隊へ戻ることにする。靴もなく素足でトボトボと二日歩いて辿り着く。

軍隊で逃亡は銃殺刑だ。しかも敵前逃亡であるからそれなりの覚悟をしていたが罰は食料探しであった。それほど食物がなかったのである。戦争で村人は避難し逃げている。主な略奪食料はトウモロコシ、タロ芋、青バナナは穴を掘りバナナの葉で包んで埋めると二日ぐらいで食べ頃になる。私の特技は椰子の木に上手に登り実を取ることだった。私達は将校以下全員、戦う体力も武器も無く、自給生活の食料探しにやっきになっていた。

米軍も日本軍の戦う意志がないのを見抜いたのか、空爆も地上からの戦車砲、迫撃砲の攻撃も一切なくなった。食料を探して四方八方ジャングルを歩いていると、野に山に、野垂れ死にしている日本兵に出会うことがあった。あの逃げた時にはぐれた十二人は今だに姿を見せない。何処かでこのように死んでいるのかと思う。

九月二日、私達は日本へ帰るため米軍指定の場所へ行くことになった。病人を支え励まし歩く体力のある者は一人もいなかった。私達は自分一人歩くのが精一杯だった。自分で歩けない者は、その場に置き去りに。これが敗戦であり戦争だった。

お願いです。憲法九条を守り、日本を戦争をしない国に育てて下さい。

ソ連法廷で政治犯二十五年刑

篠田　恒

私は昭和二十年五月、第六国境守備隊歩兵十中隊に現地入隊し、三カ月後に日ソ戦。負けず対等に戦っていたのに敗戦。しかも負けをソ連軍から通告されて、橋詰達何人かは「負けてもいないのに降伏できるか、家族が村八分にされるぞ」と、戦利品ソ連の柄付き手榴弾が使いやすいと持てるだけ持って出て行く。私は六十万とも七十万人とも言われた捕虜の一人として、シベリアの広大な畑で野宿しながら馬鈴薯掘りを、ソ連兵に監視され強制労働を強いられていた。九月は雪が降る。夏服で野宿なので急性肺炎で倒れ、テントに収容され多田軍医の手当で一命を取り止めた。兵隊三カ月で捕虜になるため軍隊に入った

ようなものだと自嘲していたが、私がシベリアの最後の日本兵になるとは。

十二月突然政治部の呼び出し。前職の満州国警務官がバレたようだ。牢には特務機関の永井兵長、同業であった安藤警佐もいたが以心伝心か、互いに目も合わさず話もせず知らない振りをする。二日間取り調べられ、三日目から営倉に入れられ更に厳しい取り調べを受けた後、アロチカ捕虜収容所で炭鉱夫にさせられる。二十三年二月、炭坑で負傷しライチハ病院に送られ、一カ月で退院しライチハ捕虜収容所に入れられ、今度は石切作業をさせられる。

★前職で吊るし上げられる

共産主義者に転向した捕虜が威張りだし、憲兵・警察・特務機関・教師・公務員などの前職者を標的に吊るし上げが始まり、ただならぬ気配を感じていると、案の定目標にされ広場で吊るし上げられる。全てはソ連に話してある、と黙秘あるのみ、奴等は益々狂気じみて迫ってくる。中でもAは声も大きく、赤旗を振りかざし、目を輝かせリダー的役目を果たしていた。あの時の勝ち誇った面構えは今も忘れない。毎日が吊るし上げで、A等は二十四時間闘争と称して、順番を決め二十四時間張り付き、朝・昼・晩「資本家・天皇制の飼犬番犬」と罵詈罵倒し眠らせず、発狂し自殺すると「白樺の肥しが出来た」と足蹴りにした。

★ハバロスクで裁判を受ける

明けて二十四年二月、山川警尉と二人ジープに乗せられ、ハバロスク七分所に入る。いきなりアクチブから「今日来た奴等は、敵か味方か見分けて本質を掴め」とアジられる。ここは針の筵の上にいるようだった。よくも日本人同士でなんて通用はしない。そんな甘っちょろいものはひとかけらもない。

三月八日、ついにハバロスク監獄に入れられる。厳重な身体検査で服の釦は全部むしり取られ、紐類、金属類も一切取り上げるが、何故か煙草だけはよい。十畳ほどの部屋にギュウギュウ詰めで、十五、六才の不良少年が新入りの持ち込んだ食料、煙草を巻きあげる。まさに百鬼夜行だ。

巻き上げた食料、煙草は牢名主が取り上げ全員に配分する。入れ替えで新入りが来て気付いたが、この牢名主日本人の私には好意的で良くしてくれた。収容所では共に戦った戦友がA等アクチブに扇動され「民衆の敵、労働者・農民の吸血鬼」と吊るし上げられ、ノルマ達成でくたくたで眠りも妨害されたが、監獄では敵であったロシア人から同情もされ睡眠も充分とれた。

同室のロシア人はウクライナや欧露、中央アジアから一カ月かかって連れられてきた者が大勢いる。ここは監獄でなく難癖をつけ逮捕し、囚人の烙印を押

し、シベリア全土の強制労働所に配分しタダ働きさせる「囚人製造所」であることを皆が承知している。当時の囚人数は三、四千万人とも言われた。

次は未決監獄に移る。幸い小部屋で元憲兵梅沢、機動部隊長水島少佐、奉天事件の石川信一と牢名主のウクライナ人だ。六時起床、十時消灯、黒パン三百グラム、塩汁一杯の監獄生活が続く。その間一度だけ取り調べを受けるが、どうやら裁判の下準備でたいした取り調べはなかった。ここから監獄車に乗せられ三十分ほどの内務省の一室で、政治部の少尉がこれから裁判を行なうと宣言する。小部屋には、陸軍中野学校出身の江角、佐藤、西畑の各大尉。元憲兵の岡本、萩原、西と会田老人が居て、私の順で呼び出される。私は兵籍三カ月の二等兵だと話すと、この人達はいぶかって、何故ここにいると同情してくれ、吊るし上げでソ連の標的にされたと教えてくれる。

裁判は判で押したように一律一人二十分で、二十五年の刑が宣告される。部屋の真中の机に裁判長の少佐。片方の机に検事の中尉二名と通訳。扉に剣付き鉄砲の兵が配置され、弁護側は空席で裁判が始まる。

型通りの本人確認が済むと、通訳を無視して罪状をペラペラ読む。私が判ったか理解したかはお構い無し。五分抗議したのに通訳はニズナーユ（知らない）と二秒のロシア語に訳して判決に入る。罪状は「スターリン憲法五十八条の四項」即ち、資本主義援助罪に該当と言う。まったく馬鹿げているが通用しない。日本の職業の職種を他の国が罰するのだ。

収容所の雑談で前職は先生と言うと、少国民を軍国主義者に教育した。役場の小使をしていたなら、国家権力の片方を担いだ。会社の係長と言えば、部下を搾取した。とアクチブに吊るし上げられ資本主義援助罪にされる。アクチブは狡猾な手段で吊るし上げの標的捜しにやっきになっている。日本に生きて帰ったらアクチブを一人づつ捜し出し、殺して廻ろうと思ったほどだ。

★政治犯二十五年の威力

こんな訳で二十五年囚が次々と出来上がり、私は既決監房に行く。大部屋で日本人ばかり四十数人おり自己紹介をする。これから獄舎では二十五年の政治犯と言えば、ロシアの囚人も一歩引き、尊敬されると先輩各位が教えてくれる。ある時使役で未決者の部屋の修理に行って、この部屋の大男のロシア人から煙草と黒パンをせしめた。痩せ細った我輩でも、政治犯二十五年の肩書の威力にまんざら捨てたものではないと威張ったものだ。一カ月ほどで体調を崩し地下の保護室へ移され、食事は病人食で量の少ないのに閉口した。

★好好爺　田辺老人

保護室の住人は、アカバ特務機関の竹原中佐。樺太師団参謀鈴木大佐。ハルピン特務機関の田辺老人。田辺老人は四国松山の人で、日露戦争の日本海海戦で撃沈された巡洋艦ナヒモフの艦長が松山捕虜収容所にいて、田辺さんは収容所の売店で働き艦長に可愛がられ帰国する時ついて行き、ウラジオストックを根城にアリューシャンからカムチャツカの極東の各都市を巡り大儲けをしたが、ロシア革命で丸裸になった話は、日本人にもロシア人にも興味があった。

田辺老人は、同室のロシア人囚人の手紙の代筆をしたり、文字や文法を教え、算数など計算も教えロシア人から尊敬されていた。この語学力で特務機関員にされていた。

★収容所流転の旅始まる

五月中旬日本人既決囚が集められ、二手に分かれ幌つきトラックに乗せられ私は五分所に収容され、日本人捕虜が三百人ほどいた。この捕虜達は、格好の吊るし上げの好餌が舞い込んできたと喜んだが、我々は札付きの囚人集団として別棟に入れられ、出入り口はソ連兵が着剣で二十四時間監視するが、空気を遮断することは出来ず、連日連夜奴等の罵声が棟の四方八方から飛び込んできた。よくも飽きもせず赤旗を振り、インターナショナルを歌い、スターリン大元帥陛下万歳と熱烈大声で叫び、我々を生きて日本に帰すなと罵った。

我々はソ連の一方的な判決で二十五年間のタダ働き囚人だ。働けば認めたことになるので出来る限り就労拒否に出て、集合時間に遅れる、作業はノルマ無視でダラダラ手抜きをする。五分所の他の捕虜はノルマ達成に名誉をかけて働いている。時たま五分所の奴等と遭遇するが、互いに睨み合ったものだ。六月に第二団が入所してきた、奉天事件の連中が主力である。

第二団に続き次々入所してくる。スターリン憲法五十八条の裁判が軌道に乗り快調に動き出したとみえる。そのため我ら囚人だけ六分所へ移る。ここは資本主義援助者の烙印を押された囚人だけで静かだが、環境と待遇は罪人の監獄食だ。とにかく二十五年タダ働きされる連中が続々入ってきた。

主な人達は、木下秀明大佐を始めとする機動部隊の一団。長谷川宇一報道部長。私の直属上官、独立混成第一三五旅団長浜田十之助少将。浜田少将は私も六国ですと言うと、よく生きていてくれたと涙を流して喜んで下さる。少将と二等兵で面識もないのに、後に少将は高齢のため脳溢血で死亡する。日ソ戦直前日本の参謀本部から出張してきた板間訓一少将。朝鮮軍の川目太郎少将。満州国外交部次長の下村氏。満鉄幹部の山本幡男氏。山本氏は「収容所からの手紙」で広く国民の知るところとなる人物だった。

そして、浅原正基こと諸戸文男が入ってきた。浅原は自分の名をモロトフと読めるように改名し、捕虜を共産党員に洗脳する日本新聞の最高責任者になり

、アクチブ誕生の張本人で七十万捕虜の頂点に君臨し、シベリア天皇の異名を冠された人物である。アクチブ内の抗争で吊るし上げられ、二十五年囚の判決を受けてきたのだ。ここに居る人達は浅原一派の吊るし上げで「白樺の肥やしにするぞ」とアジられた人ばかりだ。浅原と同室の人によると奴は毎日毎日昼も夜も「殺しの使者」が来ると怯えて自殺を企てたという。

シベリアで五度目の冬が来る頃、瀬島中佐が入って来た。ここ六分所は囚人捕虜ばかりだが、ソ連に激しく抵抗する者だけ収容所の中を更に柵で囲み、懲罰隊とし私も入れられるが抵抗運動は益々意気軒昂になる。早く帰りたい者はソ連に忠誠心を見せようとし、我々は抵抗することに生き甲斐を持っていた。

労働囚人だから働かされる。アメリカから戦争中にタダで貰った大型軍用トラックに八十名づつ詰め込まれ、厳寒の飛行場建設にかり出される。途中二十分所前を通るが、ある日、警戒兵が二十分所の捕虜は元気よく歌を歌っている、お前達も歌えときた。トラックを止め聞くと、四列縦隊でスクラムを組み、庭内を行進しながら労働歌や革命歌を大声で歌い、赤旗を振って気合いを入れている奴も見える。よしとばかり「歩兵の本領」「関東軍の歌」二曲を軍歌演習の要領で歌う。二十分所は呆気に取られ静かになる。警戒兵はお前達の方が声が大きかったと喜んでいる。後に二十分所から来た者に聞くと、えらく勇ましい連中がいるもんだと感心し、赤旗組は益々反動責めに躍起になったとか。

★囚人食から捕虜食に格上げ

二月になった。突然囚人食から捕虜食に変わり量が増える。量を増やし体力を付けさせる理由が無気味に思えるが、量が増えたことは嬉しい。情報は囚人だけ残り他は帰国したとか。我々五十名は先の五分所へ他は二十一分所へ移され、他に中国へB級C級戦犯として送られた者もいた。また他の収容所の強行分子が一人二人と入ってくる。その中に内山大尉がいた。彼はコタバル上陸戦の勇士で博識、見識は大変なもので、私は和歌、俳句をこの人から学んだ。彼は女流歌人、生方たずゑ女史の義弟に当たり、帰国後三カ月、沼田市の家に招かれ美食飽食で体力を回復させて戴いた。

★キラ星の如く将軍集まる

朝鮮戦争が昭和二十五年勃発した。市内は平穏、我々の労働拒否運動だけは活発である。四月、二十一分所に移る。奥地の収容所からも相当数送られてきた。皆スターリンに犯罪者にされた犠牲者で、他は全員日本に帰ったようだ。そしてここから中国へ戦犯として送られる者も大勢いた。団長に瀬島中佐を選び、後宮大将（旧宮家）。原田宇一郎第二航空司令官。清水規矩第五軍司令官。阿倍孝一一〇七師団長。塩沢清宣一一九師団長。北沢貞次郎一二三師団長。

人見与一一三五師団長。椎名正健一二四師団長。峰木十一郎八八師団長。大田貞昌七九師団長。川目太郎参謀。板間訓一参謀。河越重定参謀。野村登亀江旅団長。ノモンハン戦闘機隊長の野口少将。朴中将。文官では三井黒河領事。尾形樺太警察部長。下村外交部次長。木村吉林警務庁官。この次に、連隊長。部隊長。大隊長。中隊長クラスがずらりと揃っている。この二十一分所をハバロスク派遣軍司令部と言った人がいた。そして兵籍三カ月二等兵の私も。

班長の川岸大尉は中隊長で、羅南に上陸したソ連軍を全滅させた指揮官である。作業に出され休憩中ロシアの囚人労働者と話す内、彼は羅南上陸戦の一個大隊の一人で、猛烈な日本軍の反撃で全滅し数名生き残ったが、負け戦の罪で囚人にされたと言うのだ。昨日の敵は今日の友で、互いに共通の敵スターリンを罵り合ってきたと話してくれた。

★哀しき葬儀

抑留も六年目だ。病人も出るし、表君が帰らぬ人となった。浜田旅団長も昨年（昭和二十五年八月）鬼籍に入っているし、葬儀をソ連は認めないが反骨精神の精鋭ばかりで強行に行なう。斎場はなんと風呂場を選ぶ。祭主は後宮大将で厳粛に執り行なわれ、今でも思う、あの葬儀が本当の別離の葬儀だったと。

飛ぶ鳥も落とす高位高官も貧すれば鈍するの諺通り、インテリーはたちまち落ちぶれ、士官学校出のエリート将校の非常識、世間知らずのだらしなさ。それに引換え叩き上げの将校、農村あるいは徒弟制度経験者の忍耐力、生活力が発揮される。だが衣食足って何とやら、一応衣食が足ると俄然学問見識が光を放つ。これらも垣間越しに見せてもらった。

白髭の小林大佐は樺太真岡でソ連軍と大激戦を交えた人とは到底思われず、石井氏も北方民族オロッコ出身とは本人が言うまで誰も思わなかった。カント、ニーチェ、西田哲学や科学、文学、経済、政治と知識のある人の話を聞くことができた。牧参謀の駐独時代の話、板間少将、長谷川大佐らの洗濯場俳句会など、今にして思えばこの時期が地獄の中の楽園であった。

洗濯場俳句会より自作句を披露します。

○酷寒に耐うべきことは皆耐えて　○わめく者ありて獄舎の夜は更ける

○監房の壁に爪にて吾が名刻む　○死すべき国あらばそれまで死なれず

★諸将軍と別れる

昭和二十六年秋、突然将官連が他の施設へ連れて行かれた。金田一博士にも劣らぬ文学者の阿部中将。「敗軍の将、兵を語らず」と言ったキスカ島司令官峰木中将。飛行機の話には目の色が変るノモンハン戦闘機隊長であった野口少将。軍政家の塩沢中将。戦略家板間少将。北沢孫呉師団長もいなくなり二十一

分所も秋風とともに淋しくなった。
将軍達は捕虜協定で労働免除だが、私は労働拒否で所内をブラブラしている時は、一兵卒の私にも気楽に話しかけて下さり雑談もした。ここでは一兵卒だがロシア人がいる普通の監獄なら、政治犯二十五年と威張り、牢名主でロシアの囚人から煙草やパンをせしめられると話したら、煙草が無くなったら取りに来いと言って、パピロース（高級煙草）を下さった。

★日本から励ましに来ても

帰国の話も立ち消え、希望もなく漠然とまた年を越し発狂もせずよく頑張っている自分自身を褒める。昭和二十七年初夏のある日曜日、今日はどうしても作業に出ろと厳しい。諦めの早い奴は整列して待っている。「日曜に働けるか」といつものように拒否するが今日は特に強行だ。なにかあるなと感ぐったが解からぬまま、不平タラタラで作業に出される。帰ると病人から、日本から参議院議員の高良トミ女史が来たと言うのだ。ソ連側は、元気な人は魚釣りのリクレエーションに言ったと説明しようとしたので、貴女が来るので、話をさせないように日曜だが、全員作業に出したと直接伝えたと話した。帰すなら会わすはずだ、帰す気持ちがないと解かりまたノイローゼー者が増えた。女史が帰って一カ月後、女史の手紙が通訳により発表された。「命を大切にして頑張って下さい。」帰れます頑張れとは書いてないようだ。

★帰国始まる

日本からはるばる励ましに来ても、一向に帰れる気配もなく一年が過ぎた。昭和二十八年の夏シベリアに強制連行され八年が過ぎ、辛抱も限界か前途を悲観したのか、松野君他四名が脱走し逮捕された。団長であった木村氏も責任を追求され一カ月の禁固刑になる。脱走騒ぎも落ち着いた頃、始めて第一次帰国者が少数発表された。帰国は昭和三十一年までの三年間に十三次まで数えたから、本当に少数づつの帰国者であった。帰国者は私達残された者の家族へ「生きている」と言う通知者でもあった。

日数を計算し、家族からの便りを待ったがなかなか届かず、やはりソ連方式だと半ば諦めた頃、日本からの便りが届いた。ソ連側は一人一人一室に呼び込み勿体を付けて手渡し、特に睨まれている者は嫌味と脅迫を加えた。後日この便りは一カ月前に届いていたと判り、私達の計算は正しかったことを証明したが、一カ月隠された間に死亡した人もあり強行に抗議した。

私には三回目で届いた。懐かしい筆跡の一行一行、読む内、涙があふれ出て読めない。八年振りで知る家郷の様子。長男と次弟は無事復員（軍隊から戦後帰ること）次兄と姉は病死、三兄はインパールで戦死とあった。その夜は一睡

も出来なかった。また一次帰国者の数人が私の消息を伝えて下さっていたこと。伊藤氏は拙宅を探し訪ねて、詳細を伝えて下さったことなどが判り感謝している。やがて小包みも届くようになり、私には長野県と家から来た。心のこもった品々と食品は分け合った。写真も来た。老いた父母、成人した弟妹達。私は子どものようにはしゃいでいた。

録音で家族の励ましの声を吹き込んだのもあり、バラックの中で聞くと、途中で誰もが呻き声を出し「やめてくれ」と叫ぶ。家族の悲痛な声、切ない訴え、幼い子のあどけない歌声。我々の気持ちは掻き乱れ、断腸の苦しみだ。とても全部聞けるものではない。この小包みもソ連側は恩を着せ、入っていた新聞、雑誌、手紙、風景写真は全部没収したのだ。押収された品々は小包みで送られてきた物品で買収し取り戻すなどして、日本国内は勿論、世界情勢も判ってきた。

こうした中でも、ソ連側にへつらう者とそうでない者との溝が益々深まっていき昭和二十九年、即ち、九年目の夏をむかえる。

★社会党代議士来る

昭和二十九年夏、六分所全員が移って来た。この中に渡満以来お世話を受けた岡事務官を始め、知人が十名程いて旧交を温め合った。また朝鮮、中国、蒙古人も三十数名いたが、主力は朝鮮の人で殆どが二十代の青年であった。彼等は共産主義教育や赤軍に反抗した者、戦後カムチャツカ方面へ強制稼動させられ、反共を繰り返し囚人として「札付き」として送られてきたが、なかなかの好青年達ばかりだった。

夏のある日作業から帰ると、いつもと様子が違う。ソ連側も何か忙しそうだ。翌朝、作業出動時刻になっても誰も集まらず休みになる。午後、日本から社会党代議士が来て広場の演台に並ぶ。野溝勝氏が代表で、穂積七郎氏が挨拶し、戸叶里子女子が激励の言葉。我々も意見を述べる。馬場大尉は朝鮮、中国、蒙古の人達を即刻それぞれの国へ送還を訴え、議員も努力すると約束する。

家族への手紙を委託する者もいた。私達は全員名で国会宛に一文を託したが、何故か社会党議員達は国会に提出しなかった。と、その後帰国した者が「国会引揚げ委員会」に問い合わせ判明したと知らせてきた。社会党に失望する。

★ノルマ事件発生

第一次帰国から手紙の往復、小包みで日用雑貨、食料、衣類の到着。代議士の来訪で全員帰国の光も見え出し、気持ちにゆとりが出来てきたが、ソ連当局は依然として態度は頑な。相も変わらずノルマ、ノルマで追い捲るばかりだ。初年兵と菜種油は絞れるだけ絞れと言うが、日本人を絞れるだけ絞る魂胆か、

作業人員を増やすと言って病弱者まで駆り立て、ノルマを達成しないと本人は勿論責任者も処罰する。

※ノルマとはソ連の生産性を高める制度で達成すると表彰、不足はスターリン憲法五十八条の一項（祖国への反逆罪＝ソ同盟の国力を低下さす目的罪）と因縁を付け、タダ働きの囚人を増す法律である。ノルマは仕事の質と量で一日に達成する目標数が決められている。決め方は出鱈目、仕事に必要な道具より頭数で決める。捕虜の食事は飢餓食で栄養失調者や餓死者が出ているのに、ロシア人の健康労働者と同じノルマが課せられている。しかし技術者は栄養失調でありながらロシアの健康な労働者を上回るノルマを達成させている。旋盤工など仕事の「質」に対し、捕虜の方が知識と技術が熟練しているからだ。シベリアでは戦争が終わり平和になってから、六万～七万人の日本人がノルマを呪って死んでいった。これは広島・長崎に継ぐ悲劇であり、ノルマの言葉を日本に定着さすほど、大勢の日本人がソ連に抑留されていた。

※印は橋詰付記。

これが昭和二十年から延々と昭和二十九年の今日まで続いているから不平不満も限界の頂点に達している。チーシン中尉が作業責任者に辛く当り脅すのを見て、大堀君が斧で中尉に一撃を加え、数メートルのクレーンに駆け上り、片方の手を切り腹に巻いていた白布を血で日の丸に染め「海ゆかば」を歌い自決を図った。馬場大尉が後を追い抱き止め一命を救った。大堀君は逮捕され、他の作業抵抗者と共に別の収容所へ移っていった。

私の帰国は昭和三十一年最終船、船上で大堀君に出会え嬉しかった。

★日本からの品物で殺傷事件発生

昭和二十八年八月第一次帰国後、日本との文通は回数も文面も厳しい制限ながら功を奏し、小包みも希望品が届くようになった。最初は軍隊の慰問袋と同じ甘味品が多かったが、味噌、醤油、煙草、缶詰等がくるようになり、マホルカ（ソ連の最低煙草、新聞紙で巻いて吸う）を吸う者はいなくなった。厚生省から一人二千円程の小包みも来た。勿論、朝鮮、中国、蒙古の人達と分け合った。ドロップは一粒づつ作業現場でラボーチ（労働者）に嘗めさせ、美しい缶は子ども達にあげ、軍手はソ連将校婦人が夜会のダンス用に欲しがった。ハンカチーフと風呂敷は高価で売れ資金源にさせて貰い、ウオッカの購入も容易になった。

このことを快く思わぬ者達がいた。ソ連側の走狗、アクチブである。奴等はソ同盟に魂を売った連中で、ソ連当局の側に立ち「虎の威を借る狐」で理論闘

争と称し警備兵を味方にして「民衆の敵、資本主義国家の物品で、祖国ソ同盟の国民を懐柔させている」とアジる。リーダーは藤松元憲兵軍曹。団長の吉田昭男。他数名で、これに強い方に付けば何とかなると考えている者が多数いるのだ。作業拒否で自分の右指五本全部を切り落とし抵抗している李君が、斧で奴等に襲いかかり藤松は顔面を切られ絶命。吉田と張は顔面を重傷（顔面だから後ろからでなく正面から襲撃）他は難を逃れ一時騒然としたが、個人の恨みで処理され、奴等アクチブはソ連から裏切られた形で終り、我々との溝だけが更に深まり、暫くして浅原一派は何処かへ連れて行かれた。おそらく浅原は身の危険を感じソ連側に頼んだと思う。

★ソ連相手に作業拒否闘争に突入

昭和二十九年も終る十二月、我慢も頂点に達し自然発生的に作業拒否に出た。今迄は私のように「働けば罪状を認めたことになる」と個人闘争していたが今度は一致団結したのだ。「長」に瀬島中佐を選び、無抵抗の抵抗を趣旨とし。ハンカチーフ。風呂敷で買収した下級ソ連兵を連絡員に使い、三分所。二十一分所もストに入った。日本から送られてくるハンカチーフ、風呂敷はソ連婦人の超高級品として垂涎の品物である。ロシアの女性は子どもの頃から頭に布を頬かむりする風習がある。入ソした頃は褌を頭に被り、颯爽と歩いている女性もいたが近頃は見なくなった。誰かが使用法を教えたと思う。風呂敷は絹で絵柄も良くスカーフと勘違いしているのだ。絹の靴下に負けない誘惑心を女性に与えている、この品を下級兵士に無料配布するから何でも言うことを聞く。

モスクワの共産党本部、最高議会議長、スターリン首相、赤十字社に人権を無視した労働をテーマに善処を要求する陳情書の提出から始め、様子を見ることにした。そして昭和三十年の元旦を迎えた。元旦は日本の家族から正月用に送られた品々を飾り、送ってきた食料品を出し合い祝った。時間が充分あるので経験者の講演会を開き、木下大佐のパレンバン・インパール作戦。斎藤大佐のノモンハン戦。末広大佐のガダルカナル戦。松岡中佐のコタバル上陸戦。上野領事のドイツ軍侵攻時のワルシャワ脱出。香川氏のモスクワ特派員時代のスターリンの粛正。瀬島中佐の宮中皇室皇族の内情や太平洋戦争開始前後の内閣、軍部の状況等々。どれも貴重な内容であった。

厳冬を乗り越えもうすぐ春だと南風が教えてくれた三月十五日未明、突然敵襲の声で全員飛び起きる。ソ連兵が手に手に棍棒を持って、塀を押し倒し四方から襲いかかってきた。指示通り無抵抗で寝台や柱にしがみつく者。バラックの収容所がギシギシ揺れる。上着とズボンを脱いで寝ていた姿のまま、一人一人担ぎ出されトラックに詰め込まれる。見ると消防車数台も待機し投光器は昼

を欺く明るさだ。これが陳情書の返礼だった。モスクワから派遣されたバチコフ中将が三千名の兵を指揮して襲ってきたのである。捕われた私は断食闘争を宣言し抵抗したが、パイプを口に押し込まれ強引に流動物を流し込まれた。

事件が一段落すると少数だが日本に帰る者も出た。この人らが舞鶴でマスコミに発表し事件は世界に発信され、真相がソ連側に逆輸入され、収容所職員の大半が入れ代わった。日本人を目の仇にしていた政治部ミーシン少佐は降等させられ何処かへ行った。ミーシンは日本人を巧みに操り仲間を裏切るスパイ行為をさせていた。私達は誰がスパイかと疑心暗鬼で仲違いや仲間割れにまで発展したこともしばしばであった。「私は日本人として皆さんを裏切る行為は出来ない」と遺書を残し自決した内藤軍医も、ミーシンによるスパイ強要が原因だった。軍医は私と同じ作業班で、自決前夜一人でギターを弾いていた。おっとりした性格の持ち主で、私には曲名は判らないが、静かに心に染み込む曲であった。

★あわや童貞喪失

田村大佐（関東軍参謀）が激戦中も手放さなかった座右の書「唐詩撰」をお借りして読みふけった。難解な和訳は大佐が解説もしてくれた。新生中国の人民日報も綴られ置かれた。完訳は出来ないが大体の内容を伝えるのが私の役目でもあった。このお陰で中国が新しく制定した簡略文字を習得した。

メーデーも過ぎた頃、収容所の外へトラックを運転し一人で、食料倉庫へ食材や衣服を受け取りに行ったり、駅へ収容所宛の荷物を取りに行ったりした。一歩収容所を出ると市民と同じで、物見遊山の気分になり道草や寄り道をして自由を満喫していた。しかし荷物を積んだ帰りは泥棒王国で盗む、上り坂でスピードが落ちると荷台に飛び乗り荷物を落とす。通行人は見ているだけ、運転手と泥棒がグルなので、捕虜を使ったら被害が無くなったという国だ。

女囚刑務所へ女囚が栽培している野菜を取りに行くことになった。女囚に掴まり盥回しで隠まわれ、命を落とした捕虜もいた。入り口で衛兵が付くが、案の定、棟の間から隠れていた女囚の一団が歓声を挙げて殺到してきた。年配の衛兵はニャリと笑い黙認するそうだが、運良く十七、八才の子どもの衛兵だったのでびっくり仰天し、襲いかかる女囚に向けマンドリン（自動小銃）を水平発砲し何人か倒れ、仲間を見捨てあっと言う間に棟に逃げ込み静かになった。

女囚が妊娠すると「女」に格上げされ、六人だか八人子を産むと「祖国の母」の名誉称号と勲章が与えられる国なので、女囚も一生懸命である。

★また帰国に漏れる

昭和三十年夏の終り頃、わが分所から瀬島中佐だけが帰国した。しかし他の

収容所から極東軍事裁判に出廷した重要人物や将官も帰国し、浅原一派も帰ったと判った。私のような初年兵や下っ端官吏が残され、ソ連側の魂胆がどこにあるのか見当もつかなかったが、反共魂だけは益々盛んになった。そして一年後残された理由が判ったのである。

★光は東から

昭和三十一年、シベリアへ強制連行されて十一年目、その内七年間はソ連の囚人として、ハバロスクで強制労働付きの獄舎生活だ。十月に入ると一大光明が東から差し込んできた。鳩山首相の訪ソである。日ソ国交回復共同宣言が発表された。もう作業は手に付かない毎日で適当に働いたが、十一月に入ると他の収容所と連絡をとってくれるサービスを始めてくれた。喜んでいるとなんのことない、日本人墓地を造るから手分けして鉄柵や、墓標を製造させるためだった。国際協定で労働可能な下級者を帰国させずこの仕事に当てたのだ。

私有地は一切ないのでココと決めると何でも出来る。墓地でない処を墓地にし、国交回復で日本からの墓参者を呼ぶソ連の「村起こし」と看破する者もいたが、作業拒否の常套者も率先し祈りながら一つ一つ墓標を製作していた。私達は密かに墓地と決まった土地の土を持ち帰ることにし、ご希望するご遺族にお渡しすることにし、私は長野県庁を経由し善光寺に献じ冥福を祈った。

十二月になると作業中止になり、収容獄舎監視棟の投光器も消え、自由解放の処置がとられ昼間なら自由に外出が許され、市内見物、映画館にも自由に出入りでき、食料運搬のトラックで市内をドライブしていた私は地の利に詳しく、案内役に重宝がられた。

★不当抑留十一年に終止符

他の施設も閉鎖され、欧露やシベリア各地から将官、将校が集められて来た。最後の日本人を帰すとあってソ連側も最大級のサービスに努力し、何を着せて帰すかになり問題が発生した。ソ連側は将校以上は「背広・外套」を支給すると言う。この時将校側から、今日まで生死を共にし分かち合った我々は階級を超越してソ連側に抵抗してきた、服装で差別するとは何事か、破れ服でよいから同じ衣服を与えよと、抗議要求し受け入れさせた。しかし欧露、ウラジミールの将校達はシベリア側に合せず、ソ連の申し入れを感謝し受け入れると強行な意思表示をし、差別は当然と言い切り、シベリア組を唖然とさせた。

十二月二十二日待ちに待った帰国の日が来た。ハバロスク駅には収容所の職員、家族、作業現場の監督、労働者が見送りに来て、涙してくれる者もいた。

何か一抹の情が湧いてくる。輸送は家畜用の木造貨車だったが、旅客列車の停車しているホームに案内される。病人と将官は病院車、我々は寝台車だ。七年余り過ごしたハバロスクを後にして、雪の曠野を列車は間違いなく「東」へ向って走っている。日本へ帰すと言って貨車に乗せ西へ西へ向かった頃を思い出す。翌二十三日午後ナホトカ到着。ソ連軍楽隊が勇ましい楽隊で迎えてくれた。ナホトカ港は氷に閉ざされ岸壁には日の丸をはためかせた興安丸が巨大な船体を横付けしている。既に乗船していて甲板から大勢が手を振っている。

我々が本当の最後の乗船者だと云うが疑心暗鬼だ、ソ連側はいつも何処でもバレル嘘を平気で言うからだ。型通り名前を呼ばれ乗船する、雑兵の一兵卒を最後の最後に残したソ連側の意図がなんであったか理解出来ない。舷側で看護婦が体を抱えるように迎えてくれたのが、白衣の観音様に見えた。

※最後の引揚者は平成九年三月二十五日蜂谷弥三郎。※印は橋詰付記。

※ナホトカからの引揚げ

昭和二十一年十二月八日、第一船（大久丸）二、五五五人で始まる。以後、昭和二十五年五月十三日、二二一船迄に、四四四、六三九人が引き揚げ。一年間引揚げがなく、やきもきする内、突然。

昭和二十六年四月、ソ連国営タス通信世界に向け、ソ連領土内に抑留日本人一人も居ず、日本人引揚げ終了宣言。

国交のない日本政府は何も言えない時代に、引揚者がソ連に対し「もう一度シベリアへ連れて行け、日本人が強制労働されられている場所を俺がソ連に教えてやる」と猛然と反発運動を展開し。五年後の、昭和三十年四月十八日、ナホトカより引揚げ再開。

昭和三十一年十二月二十六日（興安丸）一、〇二五人でナホトカからは終り、ソ連からの引揚げはサハリン＝樺太真岡港に移り、昭和三十三年九月（白山丸）で終る。※印は橋詰付記。

★十七年目に踏む祖国の土

乗船し出港せず湾内で一泊。嬉しかったのは日本が民主主義国家になっていたことだ。病人だけ一等船室、他は序列もなく将官、将校、参謀、兵も一般船室だ。この処遇に欧露組は不満側と満足側に別れ、不満で文句を言う者に船員や看護婦から「皆さんは病人を除き皆平等です」と、教育されていた。

急遽、名誉団長に後宮大将（旧宮家）団長は木下大佐を決め、その夜の食事は赤飯、鯛の尾頭付き、日本酒一合瓶が配膳され、一口一口を味わった。玉有船長、厚生省係員の労いと歓迎の挨拶。団長の答辞に泣く者もいた。嬉しくて眠れず、語り合う内に夜が明け、朝食は懐かしい味噌汁をする。出港の汽笛とドラで甲板へ全員出る。興安丸は砕氷船に誘導され港外に向きを変える。私

は遠ざかる悪魔の山並みを眺め、憎悪が脈絡として脳裏を駆け巡り、あの空の下に取り残されている日本人がまだ居ると疑いの気持ちだ。

航行二日目、日本領海に入ったのか新聞社の飛行機が飛来し、新聞雑誌を投下してくれたが半分以上は海に落下した。二十五日夕闇の中に日本の灯が見え始めボタ雪が降ってきた。日本の雪のなんと暖かいことか、私達は体に雪を積もらせ日本の「灯」を見つづけていた。夜が明け検疫が済むと、先に帰国した瀬島中佐、宮田参謀（竹田宮）益谷参議院議長、山下春江女史等が乗船し全員整列の前で労苦をねぎらってくれた。旧宮家とは言え、後宮大将には直立不動で歓迎の挨拶をされた。巡視艇に乗り換え平桟橋に着くと、私は力一杯日本の土を踏んだ。

※平成六年平桟橋復元さる

敗戦時、海外に軍人・軍属三百三十万人。一般邦人三百万人と推定され。日本各港に引揚げ。舞鶴は六十六万四千五百三十一人。遺骨一万六千二百六十九柱が海外から上陸。引揚者が涙で濡らした平桟橋は木造で腐りなくなったので、シベリア引揚者が二千六百万円を集め、舞鶴市に「抑留の史実」として桟橋復元を願い、平成六年五月二十七日復元式典を行なう。復元は桧の三倍も腐蝕や虫食いに強いアフリカのボンゴシ材を選ぶ。ボンゴシ材は原木輸出禁止材のため設計図を送り、加工材を受取り舞鶴で組立てる。この復元式で奇跡発生。復元式は船からの上陸を再現、桟橋ではシベリアで死んだ父の娘が、父の名を書いた幟を持って立つ。幟を見て上陸した須田（当時十七才）が「俺は山本治をシベリアで埋めてきた」と名乗り出て。同年七月シベリアで掘出し遺族に渡し「緑区戦争体験記録集第二集（平成七年度）」に発表

私は記録係で復元式を収録ビデオ制作。※印橋詰記

★舞鶴

平寮へ進む両側の道は家族の人垣が優先され、マスコミは遠慮している様子が伺えた。少し進むと両側から飛び付いて来た者がいた。兄と弟だった。平寮で朝食だ。ここでも先に帰った長谷川大佐を筆頭に、先に帰った仲間達が大勢待っている。家族に囲まれ家族が持ち込んだ料理で一杯やっている者もいる。正月と盆が一緒に来たようだ。ソ連から帰国すると舞鶴では裸にして所持品を調べ、米軍の厳しい取り調べがあると聞いていたが、日本が独立国になったのかそれらはなかった。

舞鶴二日目は慰霊祭が挙行された。祭壇には荒法師と呼ばれていた津森中佐が奉持してきた位牌と、ウラジミル監獄で獄死した近衛文隆氏の遺骨が安置さ

れ、天皇皇后よりの御下賜品。国会議長。京都府知事と市長。舞鶴市長からの花束で飾られ、東本願寺法主と名誉団長の後宮大将で厳粛に行なわれた。

発見されたら没収または再拘留されるソ連の公文書（ソ連の私への囚人判決書）を私が隠し持ち込みに成功したのを知っている塩沢中将の勧めで、毎日新聞記者に見せた。翌日の毎日新聞に大きく報道され、外務省、厚生省、警視庁、日赤も是非と言われたのでお見せした。長谷川宇一大佐から朝日新聞へもと言われ見せたところ、ソ連軍事法廷の判決文は、誤字文法も出鱈目で、罪状を「無効」に出来る代物と酷評の記事が朝日新聞を通し世界に発信され、私は拍手喝采溜飲を下げ、ソ連当局は面目を失墜した。

★ふるさとへ向かう

十二月二十九日舞鶴出発。停車する駅ごとで歓迎を受け花束やお菓子、弁当が贈られる。さながら戦勝国の凱旋兵士の扱いで、捕虜になれば私も家族も村八分にされる心配がないことが判る。名古屋で乗換、駅員の案内で乗った一両が引揚げ専用車である。西沢長野県副知事や先の帰国者十数名が名古屋まで出迎えに来ていて下さっていた。それに舞鶴からの血縁者や報道が加わり、敗戦国でありながら、戦勝国ソ連が自国の戦後復興に、満州から働ける日本人を七十万人も投入したのに、祖国日本の方が豊かな国に復興していることが肌に伝わってきた。

順路は名古屋から中央線で塩尻経由、飯田線に乗換え。十二月三十日早朝、飯田に着く。駅前で県総合事務所長、飯田市長の歓迎を受け、当地出身者四名はそれぞれの家庭へ、重病の勝又中尉は舞鶴から付き添っている日赤看護婦さんの看護を受けながら病院へ直行。私は次の列車で村の駅に着く。駅には村長、恩師を始め友人知人、村人多数に迎えられ、この駅を出発して満州に渡り十七年振りにふるさとへ戻ることが出来た。明日は大晦日、除夜の鐘をしみじみと聞こう。

戦争が終り平和になってから

満州第六国境守備隊　大隊本部　軍医　多田　久男

（前文の篠田を助けた軍医）

昭和二十年八月二十一日武装解除。九月上旬孫呉へ連行される。既に大勢の将兵、一般日本人が集められていた。私は天幕でこの人達の診療を命じられた

。毎晩ソ連兵が女を求めにくるので、困り果て朝鮮の元従軍慰安婦に頼み、日本婦人の貞操を守って貰っていた。

可哀想なのは乳幼児で、母親はショックと栄養失調で母乳が出ず、米粥を作ろうにも米はなく、高粱粥を作って飲ますが受け付けず、直ぐ吐き出してしまうか下痢を起こし一両日には衰弱し死亡する。医者としてこれ程遺憾に思ったことは他にはない。栄養と医薬さえ有ったならば、この乳幼児の殆どは成長し、永く世に生を受けられた筈である。ここにも無辜の尊い犠牲者を見せつけられるのだった。こうした避難者の多くが戦後四十五年を経て、今日、残留日本人孤児として、肉親を求め来日する度に、私は胸が痛くなると同時に、孫呉で診察した乳幼児の面影が脳裏に去来するのである。

孫呉で、兵隊だけ日本へ帰すと言って黒河に向かう。途中私の所属した第六国境守備隊歩兵九中隊・十中隊・砲兵が攻防した激戦地の朝水を通過、戦死した敵、味方の兵が累々と放置され、爆破された戦車も野晒しのままで、死臭が漂っている。

※野晒しの死体は、シベリアへ連行され病気になり、邪魔者として昭和二十一年三月、徒歩で満州へ追放された上村（豊橋市）が、同年六月中共軍の監視下で埋葬してきたと証言している。※印は橋詰記

後年、諸調査で判ったことは、スターリンは自国戦死者の埋葬よりも、ソ連戦後復興のために「働く男と物資」を優先させ、鉄は柄の折れたスコップから、黒河～北安間、三百四キロメートルの鉄道線路も外させシベリアへ運ばせ、捕虜に第二シベリア鉄道（バム鉄道）を建設させる。鉄道建設は枕木一本が捕虜一人の命であったとの証言もある。その他、秋に収穫した穀物、豚の餌まで徴発しソ連へ運び、満州はこの冬食料危機になった。

黒河から船で対岸のブラゴエに渡り、夏の軍服で野宿しながら一日歩いては、一日農場で馬鈴薯掘り。一日の食料に似合う馬鈴薯を貰い、歩いては薯掘りを繰り返して、北へ北へと歩く、霜が下り氷が張り、雪になる。野宿を一ヵ月半してバラック小屋に入れられる。騙されたと知らず、これが日本へ帰すための行軍と辛抱した。

やがて私はブレーヤ収容所の石切場で冬を越すことになる。騙され、帰国出来ないと言う精神状態と、餓死者の出る食料事情で次第に衰える体力に、激しい重労働が科せられ、大多数の将兵が栄養失調になる。この状態に寒気が加わると、直ぐ肺炎を起こし腹膜炎になる。とても難治で入院出来た人もいたが、殆どの人はブレーヤの医務室で亡くなった。死ぬと裸にさせ、衣料品も無いの

か褌まで剥がし、丸裸にさす徹底振りだ。
肺炎で高熱を出し危篤状態の人が、床を這い廻っている。どうしたと聞くと「お袋が寿司を持って来たのに、無くなったので探している。」と言い、夜明け前に死亡した。日本に帰り一家で花見をしながら死んでいったと思う。これらは枚挙に及んだ悲しい出来事であった。

ソ連側が死亡者名簿を作成したのは、昭和二十一年春からのことで、それまでに死んだ人の名簿は無く数えられていないのである。何せ物凄く虱が繁殖し、毎朝毛布を外に持ち出し、外気に晒しておくと、虱は胡麻塩を振り播いたように凍死するが、卵は死なないので一向に退治出来ない。
若しこの状況下に虱が法定伝染病「発疹チフス」を媒介したら捕虜は全滅間違いないので、医者としてソ連側に熱湯で虱の卵まで殺せる消毒所を造らせる。案の定、空恐ろしく思っていた事が伝わってきた。

ブラゴエを始め各地の捕虜収容所で、発疹チフスで血便を垂れ流し半数が死亡したと言うのである。ゼーヤ河や黒龍江の氷にバールで穴を開け、捕虜の死体を全裸にして流しているというのだ。入ソ一年目の冬の死者数は名簿作成前であるので、数には入っていない。これが後年、ソ連と日本側での死亡者数に大きな開きを生じる事になる。虱は完全に駆除したが、南京虫は駆除できず夏まで待ち、全員屋外に野宿し、建物の隙間を目張りし、三日三晩硫黄を焚き南京虫を駆除した。

※ソ連は、自国の戦後復興要員に関東軍六十四万人と、満州で「男狩り」と称し、兵隊以外の十六、七才の開拓少年を筆頭に、男子を拉致抑留しているので、六十万から七十万人の不定数をソ連が抑留し、うち六万から七万人の不定数が死亡したと見ている。
厚生省は、ソ連から帰国した日本人は、四十七万三千人と発表している。当然、連行数と帰国数の格差の内、ソ連市民権者と死亡者数の割合が問題になる。平成三年四月十八日、ソ連ゴルバチョフ大統領が来日に際し、日本人死亡者名簿を抑留団体に渡すため持参した。それによると、死亡者数はモンゴル一千五百九十七人。ソ連領内三万八千三百八十八人。合計三万九千九百八十五人であった。私は確信数の半数に驚き朝日新聞を通し、日本には数字の嘘に対し、嘘の三八（嘘のさんぱち）の言葉がある。見事に並べた三八三八八だ。と、激怒の抗議をした。その後、日本とロシア（ソ連国崩壊）の間で、北方四島返還交渉の中で、死亡者数は五万五千人を確定数にし合意した。私はこの確定数に悲しい思いでいる。何故なら、一万人近い人が北方領土返還「国益」の犠牲にされ、抹殺されたからである。※印は橋詰付記。

シベリアで最初の冬が来た。朝水開拓団の旭君（十七才）が、体力の有るうちに黒龍江も結氷したから、朝水で農業をやろうと逃げて捕まり銃殺される。私は検屍解剖を命じられたが、氷点下三十度の遺体にはメスも刃が立たず、消毒所に運び解凍し解剖したが、弾丸は心臓を貫通しており、即死と報告する。銃殺後七日目、消毒所が全焼した。旭君の怨念だと捕虜達は騒いだが、私は怨念でなく過熱発火と思っている。

※最初の冬を生き延びた中で、国際法に抵触する十八才未満者と、病人で人的資源として使えぬ者を、邪魔者を追い出すように昭和二十一年三月、黒龍江が徒歩で渡れる内に、満州に追放する死の行進をさす。生きて満州に辿り着いた内の六百五十名が、その年の六月黒河の収容所の監視員を殺害し、集団脱走で全員殺される「黒河事件」が発生しているし、朝水開拓団の岩間君は、満州に辿り着いて中共軍に入り、中共軍とオロチョン族との戦闘でオロチョン族に捕まり、莫宝清（マオパウチン）と改名し、狩猟民族オロチョンを定住さす他、オロチョンに地場産業を提供した功績が認められ、黒龍江省遜克県政治協商副主席（日本では副知事）の要職を経て、平成八年六月、山梨県石和町へオロチョンの奥さんと、長男夫婦に二人の孫を連れて帰国している。

働くことの出来ぬ病人の追放は日本へ帰そうとせず、満州（中国東北）だけでなく、北朝鮮の興南（フンナン）にも及んでいる。手記を寄せてきた二中隊、大槻猪之助氏は日本に帰すと言われ全員薄ぺらな黒服を着せられ、ソ・北朝国境に近いポシェット港へ。日本の船は居ず、ソ連の二千トン級の魚運搬船に乗せられる。乗船してビックリ、甲板には多数の重症者が転がっている。私達が最後の乗り込みで、甲板下の船倉は満員、甲板下の二階に詰め込まれる。魚の腐った臭いで頭の中がおかしくなる。蒸し暑く脱水状態になり、タラップを甲板へよじ上ると、甲板に転がされていた重症者が半数に減っている。聞くと、死んだので海に流したと言う。そして興南（フンナン）で下船させられたと。約五百名全員黒服を着せられたので別名「からす部隊」として厚生省の戦後調査に記録されている。※は橋詰付記

石切作業は岩山にハッパを掛け爆発させるので、春になると土壌が緩んで突然巨岩が落下し死亡者も出た。山田君が落下した石に足を挟まれ大腿骨折、ロシア医者と相談するが薬も医療具もないから、私任せでギブス繃帯を行なう。（三重県鳥羽市で戦友会があり参加。山田君も来ていてお礼を言って下さったが、跛行していて、誠に申し訳なく謝った。）

七中隊で徒溝子でソ連戦車軍団と死闘した曲君は、ハッパで飛び散った岩石が頭を直撃。骨がめり込み手術して助かったが、癲癇の後遺症になった。特に

凍傷が多く、手足をなくしたのは悲劇そのものであった。
人名簿が出来、死亡者名簿が作成されるようになると、死亡者数が日本に筒抜けになるので、急に健康管理が厳重になり、身体検査でソ連軍医が、裸になった捕虜の尻の肉をつねって、肉の付き具合で栄養状態を［Ⅰ群］［Ⅱ群］［O・K＝オーカ（アズダロヴィナヤ、カマンダ。栄養失調症の略語）］に振り分ける。私は百人ほどのO・Kの長に任命される。こんな食物は家畜の餌で働けるかと、代表でソ連に抗議していた松沢大尉は何処かへ連れて行かれる。

呉羽紡績にいたというロシア語の出来る小栗大尉と金田見習士官等と、土地を耕しトマト、キャベツ、マホルカ＝最低煙草の原料草の栽培もやった。朝食の汁を飲んだ者が次々真っ青な顔になり、冷や汗がたらたらと流れ、涎が出て、吐き気、嘔吐を始めた。原因は「汁」にありと調べると、マホルカの葉を刻んで汁の具にしたのだ。喫煙者は何の反応もないが、禁煙者全部が即席中毒で作業人員が半減し大問題になった。それ以後ソ連将校の立会で、食物は検査することになる。
孫呉から軍馬二頭も輓馬用に連れてきたが、水運搬や燃料の木材運びに痩せ衰えこき使われ、捕虜同様栄養失調で死ぬ。近くの林に埋め、病死でないから食べられると、ソ連に内緒で掘り返し食べるが、別段何事もなかった。

ブレーヤの石切を二年して、アラチカ収容所へ移る。アラチカは佐久間右門中隊長が責任者であったが、私達と入れ違いに何処かへ行ってしまう。程なくアクチブが台頭し、民主運動と称し吊るし上げが盛んになる。下級兵士がグループの代表になり、ブレーヤから一緒の真雁軍曹も吊るし上げられ、何処かへ連れていかれた。

アクチブはブルジョア医者を休ますなと、医者の仕事も病人の診察治療だけでは承知せず、起床前に炊事の毒見役、入室患者の食事、朝の診察、作業出発の立会検査（防寒服、防寒手袋、防寒靴に破れや湿気はないか、あれば凍傷に直結）を見届け。午前診察、終わったら、宿舎内の掃除と衛生設備の点検。午後は通行証明書を持ち、各作業現場（石炭の露天掘り）を歩いて廻り、危険防止、凍傷予防、体力と作業の適否を見て歩く。帰ると夕方の診察。夜は、防寒服、防寒手袋、防寒靴の乾燥室の巡視、不寝番の服務状態、夜トイレに行く者の服装チェック。殆ど寝る暇もなかった。
そんな中、心臓弁膜症の捕虜が肺炎になり、病院への移送は危険なので医務室で加療中、ソ連軍医が収容所内の医務室で死ねば、自分のノルマが悪くなるから入院と強行に出る。動かせば死ぬと主張したが「命令」と従わせる。トラックの荷台に乗せ付き添ったが途中で絶命する。腹が立ったので収容所長に報

告し抗議する。ソ連軍医が書類を出し署名せよと言うので、何も解からず署名する。昭和二十二年十二月三十一日、突然私は刑務所に入れられる。罪名は「日本軍医として日本軍捕虜の病弱者に対し、乱暴な治療で死に至らしめた。」と言うのだ。

刑務所の独房は大小便兼用の樽が一つ置かれ、昼夜の別なく見回りがきて正座でないと更に罪が加算される仕組みだ。食事は黒パンのカケラと99%水のスープで十日間過ごす。刑務所を出ると懲罰隊に入れられ、古い廃品ワイヤーをタガネで三センチの長さに切り釘を作る。この釘で薄板を繋ぎ合せ屋根を造るのである。トントンやっていると収容所長が連れ戻しに来る。

栄養失調もさることながら、日本人の誰もが体験したことのない酷寒だ。「痔」「神経痛」患者が圧倒的に多い。作業は十人一組で、一人休むとノルマはガタンと落ちるが、病人は何とか休んで貰いたい。夕方の診察で三十人もの病人を認定すると、翌朝の作業前ソ連軍医が患者を集め強引に再診を始める。

ソ連軍医の聴診器は明治、大正時代の古物品で、日本では昭和の初めに破棄した代物である。革命後砂上の王国、労働者農民の天国づくりに夢中で、医学は捨て置かれて、帝政時代の骨董品を後生大事に使っている。医学全般が医療道具と同じ幼稚だから見ておれぬ。一番の被害者は診察される患者である。

夜四十度の発熱が記入されていても、朝三十七度台なら健康と診断する。軍医はお前が認定した三十人の内、二十人は仮病で作業可能だと言う。二十人もの生産サボタージュを見破れなかったから、一人一日で二十日間、炭鉱の重労働の罰で、ツルハシを担いで西炭鉱で石炭掘りをやる。四日目、また収容所長が迎えに来て診療所に戻される。

ブレーヤ収容所と、ここアラチカ収容所全員が帰国出来ることになった。私一人残され、無人化したアラチカ収容所の門を閉め、施錠をガチャと掛ける役をさせられ、私は精神的に追い込まれ、発狂寸前であった。

次はライチハで、民間人も捕虜も入院している病院で医者として働いた。そして昭和二十四年秋、病人の捕虜と一緒に貨車に乗せられ帰国のためナホトカに着いた。乗船待ちだと喜んでいると、ドッコイ健康な私には土方作業が待っていた。土掘りの時、壁が崩れ捕虜が圧死した。帰国を前に実にお気の毒であった。

明日乗船と決まり喜んでいると「四分所の日本軍医が入院したから医者として残れ」と、言ってきた。「俺は土方の普通の捕虜だ帰国する」と、言おうと

したが、『医者として』と言われると、無下に断ることも出来なかった。医学生の頃から『医者は仁術』と叩き込まれているからだった。

四分所で働いている捕虜の衛生兵が「軍医殿、一人でも多く助けて、日本の家族へ帰したい、そのお手伝いを」と、言われ残ることにしたが、私は立派ではなかった。その夜は煩悩にさいなまれ、苦しみ、寝つかれなかった。

こうして九月から十一月まで病院で診療に打ち込んだ。この三カ月間の間に、帰国のためナホトカに集結する帰還者の中に、大学の同級生や、故郷の人達との奇遇も何度となくあった。この人達が私の家族に、私の生存を伝えてくれる天使になると思うと、「人命を救う職」に懸命の努力を惜しまずそそいだ。

十一月ともなると、ナホトカは地面は凍土化しツルハシもスコップも、まるでコンクリート状態で受け付けない。そして寒くなるに従い怪我人や凍傷者、入院患者が増加し、五体満足でやっとナホトカに辿り着き、強制労働を強いられて船を待つ間に、事故死、労働災害や凍傷で障害者になる人もいた。

北満、第六国境守備隊で一冬、シベリアで四冬、悪名高い日本新聞の連中と同じ船に乗った。ナホトカ港の背後に連なる「シホテ、アリニ」の山並みを私は憎悪のまなじりで睨みながら、見えなくなるまで船上に立っていた。故郷に帰ったのは昭和二十四年十二月四日である。

※平成二年、シベリアの限られた地区へ墓参が許可される。（遺骨の持ち帰りは数年後）多田他数名が墓参に行く。ライチハに着くと、婦人が「この中に医者はいますか？」多田はライチハ病院で診察加療した人かと思い手を挙げる。婦人は子どもを差し出し、「この子はチェルノブイリの被爆児です。助けて下さい。」多田はライチハ病院へ大量の医薬品を寄付するため持参した中から、母親に治療使用法を教え薬をプレゼントする。故郷は被爆で永久に住めなくなり、故郷を捨て遠く離れた、極東の地を定住先にしたというのだ。そして多田は毎年、治療兼墓参に通っている。平成三年六月シベリア鎮魂墓参ビデオテープ橋詰制作。※印は橋詰付記。

※チェルノブイリ原発事故＝昭和六十一年四月二十六日、ウクライナ共和国のキエフに近いチェルノブイリ原子力発電所で操作を誤り、原子炉が暴走し放射性物質が超大量に放出し、住民生活の出来ない汚染地を発生さす。放出された放射性物質は、八千キロメートルも離れた日本にも風に乗り到達した事故。※印は橋詰付記。

編集後記

★敗戦六十年の節目に当る本年も、十五名の諸兄姉から貴重な戦時体験談をお寄せいただき有り難うございました。

★今年も東郷町立諸輪中学校のご協力を頂き、三名の生徒諸君が祖父母の戦争体験を聞き、書き投稿。別の三名の生徒諸君が語部として祖父母の戦争体験を発表して下さいました。

★年を追う毎に戦争体験者が少なくなる中、《戦争体験を語り継ぐ若い世代》の参加に感謝します。

★戦争で死んだり傷つくのは為政者ではなく、若者や婦女子、老人です。一家の大黒柱が一番最初に死んでいくのです。

★今、地球上では武力で屈伏させ。年中どこかで戦争、テロがあり、毎日多くの人を巻き込んでいます。平和は遠いですが、あきらめたら負けです。

★日本でも憲法九条を改悪して、いつでも戦争に参加できるようにしようと、考えている人が増えています。私たちは憲法を守り、二度と戦争をしないように願い、考え、行動しています。

★世界中に平和が訪れる日まで、この語り継ぐ集いを続けたいと思います。皆様のご協力を心からお願い致します。

戦時体験記録集（第十二集）

編集・印刷・発行　------　戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日　------　平成十七年七月九日

発行部数　------　百五十部

米兵遺体、住民が虐待

名古屋空襲で撃墜のB29

1945年3月19日

関係者証言 偽装工作も

一九四五年三月、名古屋で撃墜された米爆撃機搭乗員の遺体に虐待が行われ、米軍・戦犯特捜部がB・C級戦犯容疑で関係者の事情聴取に乗り出していたことが、関係者の証言で二十四日までに明らかになった。地元では終戦の九月、あたかも墜落直後に手厚く埋葬したかのような偽装工作がドイツ人宣教師も巻き込んでひそかに行われ、偽の法要写真まで撮影して証拠提出されたが、宣教師の介在から捜査当局の態度は軟化、起訴を免れたという。捜査の対象は民間人を中心に百人にものぼったとされ、これほど大規模な〝戦犯捜査〟の実態が明らかになったのは初めて。

（社会面に関連記事）

米戦犯特捜部 捜査対象100人にも

証言したのは戦後二年間愛知県特別通訳官として在名駐留米軍司令部に勤務した中西司馬治氏（五二年死去）の長男で元名古屋市職員、中西董氏（六三）＝名古屋市熱田区。関係者がほとんど死去し実害はないと判断、公表に踏み切った。

問題の米爆撃機は四五年三月十九日未明、名古屋を空襲中に撃墜されたB29四機のうちの一機。名古屋市昭和区村雲町の民家に墜落し、搭乗員十人は即死状態で発見された。

中西氏によれば、軍、警察が容認するなか、地域住民が遺体をけったり竹やりで突くなど暴行。これに対し進駐直後の米憲兵隊の戦犯特捜部が察知、軍、警察、民間の警防団、地域住民ら百余人をリストアップ。中学生だった中西氏も、翌朝、現場に行ったことを突き止められ「本当のことを言えば、君だけは罪を免除する」と、住民の遺体虐待を追及された。

中西司馬治氏

アロイス・パッヘ師

司馬治氏は捜査初期の段階でこの動きを知り、福本柳一愛知県知事（当時、九一年死去）に墓標の建立を進言。遺体が埋められていた同市昭和区の浄元寺に十字架を建て、知事の知人だったドイツ人宣教師で戦後、初代南山大学長を務めたアロイス・パッヘ師（六九年死去）を疎開先から呼び、同師に冬の拝礼服を着てもらい墓標前で写真撮影、事故直後に行った架空の葬儀写真を装ったり、「事故直後からねんごろに墓の管理を続けた」との口裏合わせもしたという。

米・憲兵隊は十二月中旬に横浜で始まるB・C級戦犯軍事法廷に関係者を起訴するため名古屋で予備審理を開始、写真は愛知県から提出された。九月まで毎月撮影とされた折々の写真が、撮影角度も影の位置も同じだったことからニセモノと見破られ、司馬治氏も厳しく調べられたが、十一月になって担当法務官から全員無罪を伝えられた。

宣教師が〝首謀者〟

米軍も態度を軟化

憲兵隊の態度変化の真相

はその数週間後、パッヘ師が「私も取り調べを受け、（写真も含め）すべて自分の一存で行ったと話した」と司馬治氏に告白。結局、偽装写真は失敗しながら、〝首謀者〟がキリスト教徒であることが軍首脳の超法規的判断につながったことを知らされたという。

生々しい証言初めて

空襲など戦時下の調査活動で数々の新事実を発掘してきた小出裕・日朝協会愛知県連事務局長の話　空襲体験者の証言を長年集め、昭和区でも調べたが、日本側の痛みの話ばかりで、搭乗員の遺体虐待の生々しい事実が証言されたのは初めてだ。

この新聞は１９９４年（平成６年）９月２５日の毎日新聞です
緑生涯学習センター主催　２００５年（平成１７年）７月９日
第１７回　戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第１２集》１５頁　虐殺Ⅰ　の関連報道です